
冒険の準備はいいか？

上条信者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冒険の準備はいいか？

【Nコード】

N9526Y

【作者名】

上条信者

【あらすじ】

冒険者の成り立つ世界で、俺達は冒険者を目指す。

魔法も、剣も、悲劇も、友情も、冒険もあるファンタジー。

さあ、冒険の準備はいいか？

ファンタジーもの。テンプレートな基礎を守りながらも型破ったギヤグを修行したいという習作。

長い目で見守って欲しいなあ。

今までの連載の反省で、短くしながらできるだけ早くをモットーに、話は考えつつ。

第一話前編 「え、冒険者って登録しないといけないの？」（前書き）

よろしくおねがいしまー

第一話前編 「え、冒険者って登録しないといけないの？」

冒険者。

それが成り立つ世界。

様々なモンスターが蔓延り、未開の地や古代の文明、金銀財宝に数々の伝説。

それらに立ち向かい、打倒し、乗り越えて、己の命を賭け挑み続ける者。

名もなき戦場で、名もなき誰かが、名もなき骸として果てようとも、彼らが止まることは無いだろう。

覚悟が、意地が、度胸が、恐怖が、ただその脚を前へと進める。

弱者は生き残れない、強者のみがその頂へと辿り着ける。

さあ、冒険の準備はいいか？

第一話前編・「え、冒険者って登録しないといけないの？」

「やべえー金もうねーわ」

ボロい麻袋を漁ると、中身が殆ど空であることに気付いた。

「しゃーね、どっか適当なところで依頼貰うべ」

背伸びしながらそういうと、なけなしの金で買った布に包んだ安っぽい剣を手につ。

紐も鞘も付いてない中古品だが、貧乏人は贅沢言ってはいけけないだ。

一々手が片方塞がるのはめんどくさいが、武器は高い、とにかく高い。

収入の内食費と薬代の割合が異常に高い家では手が出ない程に。

「ま、いつか」

生来の重要なこと以外は軽く流してしまうこの性格のお蔭で、今までの極貧生活乗り越えてきたとも言える。

常に野宿、街なのに野宿。飯はパンと水が一食。風呂？何それおいしいの？

未だ眠りに着く我が愛しの妹、この裏通りの仲間の間では大切に扱われているお姫様をやさしく起こさないように撫でると、俺はしばらく洗濯してない一張羅を着込んで仕事を貰いに行くのだった。

依頼は見つかった。

アシパレットに被害を受けてる農家が居たので、必死こいてお願いしたらオーケーしてくれた。

アシパレットっていうのは角生えた馬っぽいモンスターで、この時期になると子供産む為に作物とかを求めて近隣の畑に現れたりする。一般の人々には手に負えない程度には強い。

冒険者からしてみると雑魚だけ。

冒険者はその名の通り、財宝求め報酬求め、命を賭ける代わりにそれなりに実りの良い収入を得られる職業の事だ。別名命の捨て場。実りはいいが危険であることには変わりなく、もちろん冒険者になる為にはそれなりの強さがなければならない、らしい。

らしい、というのは俺がこの街に着たばかりの田舎者だからだ。村から妹と都会に出てきてみたはいいものの、さっぱり右も左も解らない。

妹はそのカリスマ性からか裏通り一体からは可愛がられてるので貞操とか奴隷屋の心配いらぬ物の、食事や金、身体の薬と為ると話

は別だ。流石にこれは俺が面倒みなければならない。

しかし対して学があるわけでもなく、頭もよろしくない俺が持つて生れて出来る事と言えば身体と命くらいのもんだった。

というわけで、冒険者としていろいろ仕事を重ねつつ、現在もお仕事だったのです。

「俺ピンチ」

現実逃避から立ち直って、もう一度今の状況を整理する。

アシパレットがいる。多分依頼の奴だろう。

だけどおかしい、数が。

依頼で聴いた時の目撃情報は一頭だけだったはずなのに、今は二頭もいる。

これはまあいい。追加料金にちょっと色付けて貰えるかもしれないから。

問題は手元だ。

「・・・・・・・・」

俺の手元には無残に中ごろから木っ端みじんに折れた剣。

一頭目を相手している時に二頭目が背後から襲いかかって来たので、慌てて防いだら見事に折れやがった、ファック。

俺の武器はこれだけだ。

後は春だとはいえまだ寒いんじゃないかとよく言われる薄着のしばらく洗ってない一張羅、つか普通の服。

・・・どう考えても詰んでる。
俺の實力はがんばってアシパレットを一匹ギリギリ狩れる程度だ、
命がけで。

「フシュー！フシュー！」

「ブルルルル・・・！」

二頭とも殺る気満々なため逃げる事は不可能。
ここらへんは依頼で何度も足を運んだ山だとは言え、人間とモンスターでは根本的に地力が違いすぎる。

どうするか頭を悩ませていると、二頭の内一頭が突進してきた。

「うおおおおお！！？」

全力で横に転がり避ける。
が、追撃にもう一頭迫って来た。
立ちあがってもいない状態では避ける事が出来ない。

「あ、これ死んだな」

体重はゆうに三百キロはあるだろうか、俺を押し潰さんとして振り上げられた前足を、俺は呆然と見詰めた。

まだ、死ねないのに。

あいつに、復讐できていないのに。
妹も、^{シルカ}帰りを待っているのに。

そんなことが頭に過った時だった。

「ファイアアロー！」

一筋の光がアシパレットの首を吹き飛ばした。

第一話前編 「え、冒険者って登録しないといけないの？」（後書き）

こんくらいの長さで続けばいいな

第一話前編 その2

続けて後ろからも破裂音。

振り返ってみると、見事頭の半分程がこんがり焼けてるアシパレット。

なんか知らんが依頼達成。

やった、ついでに晩御飯もゲットだ。

早速解体する為に縄になりそうなものを探す。

肉肉、久しぶりの肉。

ナイフは・・・折れてるけど剣でいいか。

「ちょっと、あんた」

「？」

いそいそと気にアシパレットを吊るしあげていると、声が聞こえた。もしかすると、あの謎の爆発の正体だろうか。

世の中には魔法という力が存在する。

マナを己という器に溜めこみ魔力とし、呪文や祝詞で魔法を使う、らしい。

らしい、というのは俺が田舎者だからだ。

魔法使いなんて便利屋俺達の村にはいなかった。

だから見たこともないおっかない奴らだと思っていた、だってアシパの首吹き飛ばしたし。

そんな魔法使いが俺に話しかけたとしたら・・・恐すぎる。
だが逃げるわけにもいかない、だって命の恩人だし。

ここはどう対応すべきだろうか？

・・・とりあえず、舐められたら終わりだな。

「せつかく助けてあげたのにお礼とかそういうの、ないわけ？」

「うるせーばかやろー！今晚飯の解体中だ！貴重なたんぱく質だぞ！貧乏人舐めんなよ、あとありがとうございました！」

ウガー、と振り返りながら両手を威嚇するように広げてそういうと、ちよつと困惑した顔をする女の人。

金髪緑眼、ツリ目でクールとかビューティーとか似合いそうな整った顔に、杖やローブを纏った俺の魔法使い像を裏切らぬ恰好の美少女がそこにいました。

家の妹の方が可愛いけどねっ！

「え、ええ、そうね。貧乏だと大変ね。後、こちら辺アシパレットの群れが出るって依頼を受けたから来たんだけど、あんたはなんで来たの？」

「お金稼ぐ為にここの畑の農夫にお願いした」

「・・・つまりお手伝いって事？」

「ばっ、ちげーよ！依頼だよ依頼！俺冒険者だし！」

「冒険者？あんたが？」

「あ！？なんか文句あんのかよペチャパイ！」

「……ファイアアロー」

「……た、助けてくれてありがとな。俺、クインス、ただのク
インス」

「あたしはパネリア・ローシエ。パネリアでいいわ」

あの後こんがり逝きかけた俺は、なんとかほうほうの身でなんとか帰還した。

アシパレットの肉はパネリアさんの^{ファイアシャワー}火矢乱射によって焼失したため諦めた。

農夫の家で報酬だけは受け取り、帰ろうとすると、アシパレットによって死にかけた疲労で途中で気絶。

気付けばパネリアさんに拾って貰って街に還って来ていたのだった。……パネリアさん、申し訳ないです。ペチャとか言ってますいませんでした。

「で、あんたがあそこに居た理由だけど」

「俺はちゃんと働いたぞ」

「それはわかってるわよ、なんせ冒険者でもないのにモンスターに挑んでたんだし」

「は？」

何言ってるのこの子？とそんな顔でパネリアさんを見ると、その冷たいツリ目をさらにきつくして呪文を唱え始めたので慌てて止める。

「ちょ、ここ店の中だぞ!？」

「解ってるわよ、だからその不快な視線をやめなさい」

「うつす！」

「はあ・・・、じゃあもつかい聞くけど、なんであんたは冒険者でもないのにあんなことしてたの？」

「え、自分では冒険者のつもりだったんですけど」

「はあ・・・もしかして田舎から出てきたの？」

「一か月前にこの街に来ました、武器は中古の拾った剣だったけど折れたので素手、クインスです」

「・・・言っとくけど、アシパレットも冒険者にとっては雑魚よ、ランクして最低のEよ」

「なん・・・だと・・・!あんなに強いのか!？」

「冒険者登録するとね、魔力に目覚めたり気力を使えるようになるのよ。いわば通過儀礼を通った者に対するギフトね」

「へー」

てことは、冒険者登録すれば普通誰でも強くなる訳か。
・・・そっぴやしてねえな、登録。

マジかよ、冒険者って登録しないとなれないんだ。

「あれ、ならなんでみんな冒険者にならないんだ？みんな強いなら安心じゃん」

「あー・・・あれよ、冒険者になる前に通過儀礼があるって言ったでしょ？あれが物凄く痛いんだよ」

「え、どんくらい？」

「屈強な成人男子でも人によっては死ぬわね」

「何それ怖い」

第一話前編 その2（後書き）

ラグナロクとかモンハンとかファイファンとかドラクエとかを混ぜ
っ返していきます。

第一話前編 その3

「ま、まだ理由はあるんだけどね」

「え、まだあんの」

「冒険者になったらギルドに入らないといけないの。ギルドに入ってた方が色々都合がいいし、面倒もみてくれるからね。他にも力の悪用を防ぐ為つてのもあるけど。」

「だけど、ギルドに入ったらある程度の義務や貢献を果たさないと除名されたり懲罰を受けるわ。私みたいに魔法使いつてだけで乗り切れる人も入れけど、そこまで行くと魔導師^{ウィザード}レベルだから私にはまだ無理ね。要は、ギルドの犬になりなさいって事。おわかりかしら？」

「・・・なるほどな、やべえ仕事ってことか」

「そうよ、見たでしょ？魔法じゃなくても一般人には手に負えないアシパレットを雑魚扱いなのよ？力を無節操に与えたらそれこそギルドや冒険者の意味がなくなっちゃうもの。これが首輪としての理由ね」

「因みにお金とかかかる？言っちゃなんですが俺その日暮しなんで妹も居るし」

「お金はいらないわ。確実に冒険者になりたいなら専門の養成施設もあるけど、こっちは有料ね。」

「ただ、冒険者になるには対価がいる。己の命を、人生を、全てを賭ける事になるわ。出来るなら慎重な方を選ぶ方が得策よ」

「……………」

「パネリアさんにそう言われて、今まで言われたことをもう一度考えてみる。」

「命を賭けるに値するか、自分の目的は果たせるのか、妹は守れるのか。」

「そんなもん、とっくだ。」

「俺を冒険者にしてくれ」

「…………あなた正気？妹さんがいるんでしょう？そんなに家族を無駄に悲しませたいのかしら」

「あいつとはな、一個約束してんだ」

グイツと貰った酒を飲み干し、机にジョッキを叩きつけて言った。

「もし、やりたいことが見つかったら、迷うなって」

「…………呆れた。解ったわよ、連れて行ってあげる」

「あ、そうだ。後学の為に聞いときたいんだけどさ」

「何よ？」

「登録する時ってどんくらい痛かった？」

「んがつ！？そ、そんなことどうでもいいでしょ！？」

クールなビューティーパネリアさんが初めて大きく動揺した。

実は結構確信犯で質問したのだが、これは何かあるとみて間違いなさそうだ。

さらにニヤニヤしながら質問する。

「いやいや、先輩のお話俺聞きたいです！」

「~~~~~っ！わかったわよ、…………んこ…しそつに…………るくらい」

「え、何？」

「うんこ漏らしそつになるくらいつつたのよ！馬鹿死ね！！」

「そいつは痛そうだwwww」

「ほら、あれが冒険者ギルドよ」

「おーでけー」

「あんた一カ月この街に住んでるんじゃないの？」

「普段は裏通りで暮らしてるからあんまこっちにや来ないんだよなあ」

酒場を後にし、俺の冒険者登録を済ませる為に冒険者ギルドへと訪れていた。

どうしたらいいのかよくわからないと正直に言っていると、溜息つきながらも手続きをするまで座つてると開札へと向かうパネリアさんに惚れそうになる。

い、いや、俺にはシルカという大事な妹が……！

……妹はダメだな、うん。

暇なので、若干眉が寄った顔で開札のお姉さんと話しこんでるパネ

リアさんを眺めてみる。

整った顔立ちは、俺以外でもこのギルド内に存在する男たちの視線を集めているようだった。

美人で、俺を助けてくれて、その上面倒見もよくてクールビューティー、……完璧だな。

そんなことを考えていると、パネリアさんがこちらに来るよう手招きしてきたので、それに従って飲みかけの酒を置いて開札に向かう。

「どうしたん？」

「ちょっと問題発生ね」

「え、どういうこと？」

「それは私から説明させて貰うわ」

開札のお姉さんが営業スマイルで微笑みながらそう言う。
うん、美人だな。話くらい黙って聞くか。

「実はね、自由登録制度が廃止になったの」

「あ！？てめえどういうことだ！！皆登録できんじゃねーのかよ！
？事と次第によっちゃ犯すぞてめえ！！！」

「ちょっと落ち着きなさい」

「これが落ち着いてられるか・・・！」

「・・・ファイア——」

「人の話は最後まで聞くって常識だよな」

カウンター乗り越えそうな体勢を一瞬にして直立不動に戻す。

「それじゃ、説明するわよ。確かに人魔戦争時代は軍以外でも自由に動けるギルドが絶対数必要だったから、素人だろうと誰だろうと登録を認めてたけど、その戦争も終わってもう三十年経つわ。だからそのギルドも無駄に一般人を雇わなくてもよくなったわけ」

「なん・・・だと・・・」

「だから、前からあった冒険者養成施設である程度の訓練を受けた人達だけ登録を認めるようになったって事」

俺の冒険は始まる前から終わってしまったようです。

第一話前編 その3（後書き）

ちゅーちゅする？

第一話前編 その4

「どうしょ・・・俺金持ってねーぞ・・・」

「大丈夫、あなたたちみたいな人達が減った訳ではないって事は解ってるから、施設には入って貰うけど、あなた達用の学費免除の為の制度も整ってるから」

「どうやら首皮一枚で冒険者への道は繋がったらしい。
よかった、マジで。」

「それじゃ名前と住所教えて、取りあえず向こうに連絡しておくから」

「クインス、裏通りで野宿」

「・・・・・・・・・・・・・・・・いろいろ苦労してたのね」

「同情はいらねえからとつと済ませろよ」

「んじゃ、私は行くわね」

用は済んだのだとばかりにその場を颯爽と立ち去ろうとするパネリアさん。

だが俺は言いたいことがあったのですぐさま呼びとめた。

「あ、ちょっと待って」

「え？」

振り返ったパネリアさんに深々と頭を下げると、一言、こう言った。

「お世話になりました！」

「……嫌いじゃないわよ、そういの。じゃあまたね、後輩さん？」

「うっす！」

そういつて今度こそパネリアさんはギルドから出て行った、パネリアさんマジかけー。

「いつか俺もあんな冒険者になるわ」

「彼女まだ養成施設出てないわよ？」

「えっ？」

「シルカ！」

「あ、おかえりなさい兄さん」

「俺冒険者になってくるわ！ついでにお前も来るか！？」

「うん、解った」

「よし、じゃあ早速ギルドへ向かうぞ！」

すっかり忘れていたこと、養成施設に入っている間妹はどうするの

か。

稼ぎは学費でとられるだろうし、彼女も病気だ、一人にはできない。なので結論。置いてけないなら連れてくればいいじゃない。

聞けば飯も寝床もある寮を紹介してくれるらしい。なら、こんなあばら家にいるよりはるかにマシだろう。

了承も貰えたし、問題になりそうなことは思い付かない。

というわけでシル力を背負って再び裏通りを後にしようとした時だった。

「姫さん抱えて何処行く気だ坊主」

「レンヤじいかっ!」

「姫さんはこの裏通りの希望だ。そんな姫さんに無理させる気か?」

「カカツツのおやじ……」

見れば、裏通りの仲間たちが勢ぞろいして通路を塞いでいた。

皆一様に腕を組み、厳しい表情で俺を睨みつけている。

妹はこの裏通りでは正にお姫様のように扱われている。

美人なのもあるが、なんといっても全てを包み込んでくれるようなその頬笑みとカリスマ性。

邪なものがない純粹な生きる笑顔。

辛さと闇を乗り越えた者ができる、深い情愛の籠った目。

天真爛漫な柔らかい物腰。

家のパーフェクト妹は、そんな少女だ。

カカツツのおやじは希望と言った。

確かに、俺が彼女を失ったら、言っちゃ陳腐だが絶望するほかないだろう。

だが、それでも譲るわけにはいかない。

おやじ達のことを信じていない訳ではないが、シルカは俺の妹なのだから。

「皆、落ち着いて」

シルカがそう言うと、皆の緊張が若干解れた気がする。

「私は、兄さんと一緒に生きていけない。けど、みんなが私を必要としている。だからこうしましょう？私が大好きなみんなと私が大好きな兄さんが納得いくようにお別れ会をしましょうか」

「宴って事？」

誰かの手が拳がってそうシルカに聞いた。

シルカはただ微笑んで一言、そう、と答えた。

「・・・ま、クインスのバカならともかく、シルカちゃんの頼みなら仕方ねえ」

「そつだの、おい坊主！シルカちゃんを泣かせたら承知しねえぞ！」

「お、おう」

なんか妙な方向に流れて行ってるな。宴なら俺も賛成だけど。いやはや、家の妹すげえな。

うーん、明日また来いって言われたから、シルカの登録は明日でもいいか。
そう思いながら皆が自分の家からテーブルや椅子を出すのを手伝っていく。

その日の裏通りの夜は、寂れた雰囲気を感じたように陽気な喝采が上がっていたのであった。

第一話後編 「なんだと、俺の付ける職業が・・・」 (前書き)

実はこの一話しか考えていないという事実。

第一話後編 「なんだと、俺の付ける職業が・・・」

「まず職業の適性から見て行くわよ」

「うっす」

「はい」

そして翌日。

妹も編入したい旨を伝えると快く了解してくれたので、今もこうやって無事にシルカと一緒に係員の人の指示に従って手続きを済ませて行く。

しかしこのお姉さん、昨日は眼鏡かけてなかったのになんで今日はかけてるんだろ？しかもなんかノリノリだし。

「基本の職業は剣士^{ソードマン}、魔法使い^{ソーサラー}、修道士^{アコライト}、盗賊^{シーフ}、弓兵^{アーチャー}の五つよ。全員はまずこの内のどれかになって貰うわ、冒険者なのに技能がないなんて死に行くようなものよ」

「なるほどなあ、じゃあ俺は剣士かな。剣ずっと使ってたし」

「ところがそうとも限らないのよね。職業の適性ってその人の魂の方向で決まるから、要は性格の問題ね」

「どういつことだってばよ?」

「例えば剣士^{ソードマン}になる人は、勇敢で威勢がいい人が多いわね」

「俺の事？」

「確かにあなたは無駄に初対面の人に態度でかいけどね……」

「あの……」

黙っていたシルカが控えめに手を上げる。トイレかなんかだろうか？

「私、身体が弱いんですけど、そんな人でもできる職業ってあるんですか？」

「ええ、今言ったのは基本だけで、そのほかにも適性に合った様々な職業があるわ」

「それはよかったです」

ホッとした様子で胸を撫で下ろすシルカに、俺も頭を撫でながらよかったな、と声をかけた。

「じゃあ、適正測るわよ」

「どうやって測んの？」

「こっやってよ」

「いたっ!？」

「きゃっ!？」

いきなりお姉さんにプスツと針を刺された。

「なにしゃがんだ!!」

「悪かったわよ。でもほら、これで適正出たわ」

差し出されたものをマジマジと見ると、血の付着した紙がだんだんと変色して言っているのが解った。

どうやら特殊な紙に血を付けるとそれで適性が分かるらしい。

誰だ、こんな仕組みを作ったのは。俺の妹の玉のような肌を傷つけやがって。

「妹さんの適性は、魔法使い^{ソーサラー}ね。おめでとう、あなた凄い素質を持つてるわ」

「本当ですか!ありがとうございます!」

「で、お兄さんの方なんだけど……」

「ワクワク!」

無駄にワクワクとした期待を身体で表現しながら結果を待ちわびると、お姉さんは困ったとも言っような顔で俺を見てこう言った。

「……無能力者」

「は？」

「所謂無職ね」

「うそだろオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

！？」

シャウトした、全力で、力の限りを尽くして。

「たまに居るのよね、何にも適性がない人って。でも、まあ……一般人よりは強くなってるはずだし……。頑張ってる……。」

「ふあつくふあ ああああああああああ あああ あつく!!!」

「あ、あの、兄はその、ダメな人間ではありませんけど、心底ダメな人ではないと思うんです！」

「ありがとうな、シルカ。でもな、今のお前の優しさは痛いよ、クリティカルで」

そんな世界に絶望した今日のこの頃。

「じゃあ、寮に連絡しておいたから、この手紙を渡せば入れて貰えるはずよ」

「色々ありがとうございます。ほら、兄さんもいつまでも泣いてないで」

「ちくしょう……こんな世界滅んじまえばいいんだ……！」

「まあまあ……。そういえば、あちらでは色々とご都合させて貰えると聞いたんですけど」

「ええ、向こうじゃその適性職業に合わせた道具を支給して貰えるわ。もちろん投資だから利子を付けて将来返してもらうことになるけどね。それと、基本的な生活に必要なものも支給して貰えるわよ、食事とか日用品とかね。これも将来への投資よ?」

「魔法使いは何を貰えるんでしょうか？」

「そうね、媒介用の杖とか魔導書とか色々ね。魔法に関わる人は学ぶことが多いから施設の卒業も他より若干遅くなるのよね。ついでに」と彼は……」

「ええつと……」

「無能力者だから何もないかもしれないわね」

「うわぁ ああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああ！！！」

俺の悲鳴と絶叫が響き渡る。

迷惑かかるとかそういうのはもう考えてない。

つか生きる事を迷惑視されることになった無能力者に今さらプライドとかそんなない。

「じゃあ、がんばってねお二人さん」

「はい、ありがとうございます」

「見とけよ！ぜってー冒険者になってやるからな！乗れ、シルカ！」

「はいはい」

そうして俺はシルカを乗せて、まだ見ぬ冒険者養成施設へと向かった。であった。

第一話後編 その2

「ぜえ・・・ぜえ・・・！おい、シルカ・・・なんかお前重くな
つてね！？」

「む、まだ三十キロ台ですよーだ」

「馬鹿野郎おおおおお！！おまつ、ちゃんと食べつたろう
が！！」

「どっちですかー」

「どっちでもキツイ！もう何キロくらい走ってんだ！？」

「まだ十キロくらいです。でもすごいですね兄さん、私を背負った
ままこの距離を三十分弱で走りきるなんて」

「毎日命がけだったからな！！」

「ふふ、ありがとう、兄さん。私は兄さんの妹で幸せです」

「おっしゃあ！お兄ちゃんエネルギー供給完了だぜヒーハー！！」

ギアを切り替え加速して走る、テンションが上がってアドレナリン
がヒーハー！！

この通り、中々冒険者養成施設は見えてこない。

なんでも脱走などを防ぐために軽く郊外あたりあるらしいので、街
の中心にあつたギルドから必死に妹を背負って爆走中なのだ。

持ちこむ様な荷物は無い。コップとかの日用品も向こうで新しい奴貰えるだろうし、食料も昨日の宴で使いきっちゃったから今日はまだご飯食ってない。

しかしお兄ちゃんエネルギーは全てのお兄ちゃんにとって絶大なエネルギーだ、例え空腹であろうとも十キロの距離を一人抱えて走ってもまだ動ける程に！！

正直めっちゃ疲れてきたし、鍛えた人ならそうでもないかなとは思うけど、そんなこと気にしてたら脚が止まる。止まったら時間のロス。時間は有限、もつたいない。

これ貧乏人の悲しき性。^{さが}

「あ、見えてきました。あれじゃないですか」

「お！マジか！」

マイシスターから目標の発見を告げられ純粋にテンションの上がる俺。

おお、あれか、でけえな。

裏山がありそうなくらい山に隣接して造られた施設を見て、到着までもう一苦労しそうだと思息をつく。

「頑張ってください、兄さん」

「おっしやああああああああああああああああああああああああああああああ！！！」

「や、やっと、ついた……」

「お疲れ様です」

やっとのことで養成施設に辿り着いた頃には日は高く昇っていて、
燦々と照りつく日差しは俺から汗を更に出させていた。
あぢく、水くれ水。

門の前で座り込んでしまいが許してほしい、十キロ行軍に加えて山登りだ。馬がないとキツイところを歩くことなく走って来たのだ。心臓も爆発しそうだぜ。

まあ、やつとのことではいたのだ、ぐだぐだ言っても仕方ない。

大きく深呼吸を繰り返しながら何とか立ちあがると、同時に扉が開いた。

「あ」

「あ」

目の前のデカイ門じゃなくて脇の門番用の扉から出てきたことに加え、出てきた人物が知り合いであることにも驚いた。

「パネリアさんじゃん」

「あんただったのね、学長が言ってた編入者って。そっち妹さん？」

「あ、初めましてシル力です。えっと・・・」

「私はパネリア・ローシェよ、よろしく」

「はい、パネリアさん」

「パネリアで構わないわよ」

仲良く握手なパネリアさんとシルカに、置いてけぼり俺。
くっ、ならば百合百合な想像で我慢してやるぜ！

「そこ、変なこと考えてないでしょうね」

「百合百合っていいよね」

「兄さん、失礼ですよ。私は可愛い物好きなんです、百合じゃないです」

「ああ、確かに兄妹ね」

呆れたようにそういうパネリアさんだった。

「にしてもパネリアさんがまだ実習中って本当だったんだ」

「そうよ、キャシーさんから聞いたの？」

「受付姐さんから聞いた」

「だからその人がキャシーさんののよ」

「へーそうなんだ」

「兄さん、人の名前はちゃんと覚えないと」

俺、人の名前覚えんの、苦手。

「さて、なら付いてきなさい。学長室まで案内するわ」

「はい」

「わかりました」

学長ってどんな人なんだろう？女の人がいいな、美人の。
この後俺は心底この想像を後悔することになる。心底な。

第一話後編 その3

「学長、連れてきましたよ」

「入っていいわよ」

入っていいとのこと、俺は取りあえず裏通り流のドアの開き方で入室させて貰う。

「入るぜ」

ドゴォ！

ノリでドアを蹴ってみたら金具を粉碎して吹き飛んで行った。
・・・やべーマジか。
不味い、このままでは空気が微妙になること請け合いだ！何とかしなくちゃ！

「パネリアさん！俺を^{ファイアアロー}火矢で吹き飛ばしてくれ！」

「はあ！？てかなんでドア蹴り破ってんのよ！？」

「今いい！早くっ！..！」

「嫌よ、めんどくさい」

「ええい！ならシルカ、俺を殴りとばせ！！」

「ええ！？ええつと、その・・・殴ればいいの？」

「そつだ！カモンツ！」

「えゝ・・・えいつ！」

「おえあつつつ！！？」

鳩尾に繰り出されたシルカのボディブローは嗚咽させるほどの見事な威力を持って俺を部屋の中に叩き込んだ。痛いとかそういうレベルじゃない、死にたい。

我が妹の第二のスキル、怪力。この天より授かった本人には不評な謎の怪力の威力は、裏通りに来て間もないころ、彼女を襲おうとしてボッコにされた奴等がたくさんいる事から裏通り一同より太鼓判だ。

「ナイスブローだ・・・我が妹・・・よ・・・（ガクッ）」

「何なんのよ一体」

「どうも、私シルカと言います。先程ドアを蹴破って今はそこで伸びている兄のクインスの妹です」

「そう」

「因みにドアはノリで蹴破った！（ムクッ！）」

「そういうことは聞いてないわよ」

ブラウンの髪に青い瞳をした美女がこちらを眺めておりました。
後眼鏡かけてる！

どうだこの俺の見事な人物特徴は！なんつーかあれだな、パネリア
さんをそのまんま大人な人にした感じ。ビククールビューティー
とかそんなの。

そんなお方が机に座って呆れた表情です。そろもっ、背筋から何か
ヤバい衝動が沸き上がって来ますよ。こっ、ゾクゾクって。

「因みにそのドア弁償してね」

「え、やだよ、俺金持ってないもん」

「一般常識で考えてこのドアを壊したあなたが弁償するのよ」

学長さんも魔法使いっぽい職業なのか、どこからともなくスラリと
身の丈以上にデカイ杖を取り出した。

この人もふざけちゃうと実力行使のツッコミする人か、たまには優
しい人はいないのかよ。

「それでも結構我慢してるんだけど」

「じめんなさいであります!」

キュイイイイイン……と何かヤバそうなものが収束し始めたので即座に頭を下げた。謝った。

「はぁ……。で、あなたがキャシーが言ってた子?間違いないならそこにサインしてとつと出て行きなさい、私は忙しいのよ」

「はい!解りました!」

杖を向けたままなのでふざけるとずどんっ!だなぁと思いつつ、シルカと一緒に差し出された書類にサインしていく。

「詳しい説明はパネリアがしてくれるわ、後で聞いて置きなさい」

「え、学長、なんですそれ。私聞いてないですよ」

「今言ったからね」

「くっ……。この暴君め」

「ありがとっ、最高の褒め言葉だわ」

パネリアさんも屈服するその飄々とした姿に俺は「ああ、この人暴

君だな・・・」と感じていた。

俺とシルカは、パネリアさんに部屋に案内して貰うついでに色々説明されながら歩いていった。

「あなた達には学費の免除の代わりに色々と仕事をして貰うことになるわ。例えば私のように後期になると近隣のモンスター討伐とかになるけど、今のあなた達だと掃除とか修繕とかそのあたりになると思うわ」

「マジか、その程度ならお安い御用だぜ」

「ええ、私もがんばります」

「でも結構大変よ？なんせ学費と寮費は別だから、学費は学費で、寮は寮で仕事を押し付けられるからね。実質負担は二倍」

「何を言っているんですか！！」

これだから貧乏経験したことない人は！

「毎日死にかけていた日々比べれば」

「最初の襲われ続けた怖い日々比べれば」

「正に天国じゃないですか！！！」

「・・・苦労してたのね」

俺達が2人して涙を流しながら叫ぶと、呆れと悲哀が若干混じった顔でそう言われた。

「今この施設には百人くらい居て、全員寮に入ってるからいざこざ起こしたら即知れ渡るわ」

「結構多いなあ」

「ここは首都にも近いし、学長も先生も優秀な人ばかりだから、態々遠くから来てる奴もいるのよ」

「へえー」

ここ結構凄いな。

「ところであなた達、適正測ったんでしょ。何か教えてよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・えーと、私は魔法使いです」

「あら、私の後輩になるのね。よろしく」

「あ、はい。よろしくお願いします」

「・・・・・・・・」

2人が話している間、俺は今までの態度が打って変ったように静まり返っていた。てかすんげえあさつての方向を向いて「俺に話しかけるな」オーラを放っていた。

「で、あんたは？」

「聞くなよおおおおおおおおおおおおおおおおおお」

お！！！俺あれじゃん！めっちゃ触れてほしくなさそうにしてたじゃん！何で聞くの！？空気読めないの！？」

「あんたも私の恥ずかしい話聞いたじゃない」

「それはそれ、これはこれです！」

「言い訳しないでとっと喋りなさいよ」

そこまで言われて俺は身体をうち震わせながらも、何とかその忌まわしき単語を口にする。

「・・・・・・・・無能力者」
インコンプリテント

「は？」

「無能力者だっつったんだよ！！ちくしょう！！」
インコンプリテント

俺の絶叫のそのすぐ後、パネリアさんの大爆笑が響き渡った。

第二話 「夜も朝も目覚ましい」

「やだぁああああああああ一緒に寝るううううううううううううやだぁああああああああああああああああ！！！！」

「ええい、いい加減諦めなさい！女子寮と男子寮は別って説明したでしょう！？」

「シルカと一緒にじゃないと眠れないのおおおおおおおおおお
おおおおおおお！！！」

「駄々こねるな気色悪い！」

説明を受けながら寮に到着した時、衝撃の事実がパネリアさんから告げられた。

なんでも寮は女子と男子で分かれているらしく、当然その生活の場も別々で授業以外親しい仲じゃない限り男女の接触は殆どないらしい。

つまり俺とシルカは別々で寝る事になる。そんなこと許容することなどできない。

なので俺は必死こいてパネリアさんに懇願していた。

「お願いしますパネリア様、貴女のそのバストをアップする秘術でも何でもお教えしますのでどうか妹と一緒に寝かせてください！！」

「因みに秘術って？」

「あ、気にしてたんだ。あ、ごめんなさいっ、すいませ、いたっ、ごめんなさい！……だからあれですよ、簡単なことです。揉めばでかくなる、つまりは俺に揉ませる」

「死になさい」

「ア――――――――――
ッ！？」

股間をおもつきし蹴りあげられた。悲鳴とも絶叫ともつかない鶏の首を締めあげた時のような声が寮の門前にて響き渡る。
俺は必死に、ただひたすら痛みを和らげようと転げまわる。

「無様ね」

パネリアさんは俺をゴミでも見るかのような腐った目で見てそう吐き捨てる。
そんなパネリアさんにオロオロしながらも手を伸ばして自己主張する我が妹。

「あの、パネリアさん。できれば私も、兄と2人がいいです」

「正気なの！？」

まるで本気で家族を心配する時のような表情でシルカの肩を握るパ

ネリアさん、眼がガチ。

「あれよ！？なんの躊躇いもなく親しい女性でもない人にセクハラ発言を働くような変態よ！？」

「あ、それたぶん兄がパネリアさんの事を気に入ったんだと思います。珍しいですよ、こんなに早く兄と仲良くなる人」

「やめてよ！仲良くないわよ！？」

「えー」

「あんたは黙ってなさい！」

はい。

「それでも、たぶんパネリアさんが凄い人だったんだと思います。兄が昨日言っていました、『俺はいつかパネリアさんみたいな冒険者になる』って」

「ちょ、おまつ、それは言っなって言っただろっ！！？」

「いいじゃない、褒め言葉なんだし」

「恥ずかしすぎて俺が死ねるわ」

「……………」

呆気を盗られたといった表情で俺達の会話を聞くパネリアさんは、しばらく俺とシルカとの間に視線を往復させた後、溜息をついてこう言った。

「変な奴ね、あんたもその妹も」

苦笑しながらそう言うパネリアさんに、俺達も少し呆気を盗られるが、やがて顔を見合わせてから同時に言った。

「「兄妹ですから」」

「あ、でも一緒に寝るかどうかの話とは別だからね」

「けちつつっ！！！」

「眠れん（ムクッ）」

結局誤魔化しきれなかった俺とシルカは別々の寮で生活することに

なり、その際の別れの悲壮さと言ったら筆舌し難いものがあつた。
実際は泣き叫ぶ俺をパネリアさんがファイアアローしただけだったが。

それにしても、眠れない。

寝ると苦しいのだ。

寝ると襲ってくるのだ。

寝ると思ひだしてしまうのだ。

だから、いつもシルカの隣りで眠っていた。

あいつが大丈夫、大丈夫っていうから、本当にそんな気がして、いつの間にか眠っていた。

だけど、そんなあいつが今日はいない。

解っていた。これが俺の望んだ結果だ。

俺の目的の為に、俺達の始まりの為に選んだ選択肢だ。

昨日の夜、シルカという話合った。

病気のシルカが冒険者になるのは、やはりやめにしないかと言った。
ノリや目標が出来たことへのテンションの高ぶり、後先考えずに
言ってしまったこともあつたし、どうしても、危険な目に合わせる
ことへの抵抗感があつた。

しかしそれを押しのけて、あいつは言った。

俺に着いていく、と。

それなら、と俺も覚悟を決めた。

なのにどうだ、ただ普通に一睡することすらできない。

俺はどうしようもないほどこの状況に耐えられていなかった。

「どーすっかなあ……」

あいつは、眠れているだろうか。

「心配だな……」

うむ、心配だ。とても心配だ。心配し過ぎて死ぬかもしれん。
……様子
くらい見に行っても怒られないよね？

そうと決まれば即行動。基本後先考えない、それが俺。

俺は一人部屋だがなんとシルカはパネリアさんと相部屋らしい。

ついだが、パネリアさんの様子も観ておくか。

やべえ、テンション上がって来た。

「いくぜ、這いまわるへビの如くっ！」

スニキングミッションスタート
隠密作戦、開始！

第二話 その2（前書き）

戦闘書きたいなあ

第二話 その2

「ふふふ、どんな寝顔なのか楽しいーみじゃないかぁん？ん？ん？ん？ん？」

早速男子寮を音を出さぬように忍び足で出て女子寮へと鼻歌を歌いながら向かう途中。
私は見ました。

「・・・・・・・・何あの要塞」

結構暗視がきくほうの俺は見た、その女子寮のシルエットを。

よく解らない物が突き出し、そして蠢いていた。一瞬侵入を断念しかける程の訳のわからないその様を、俺に恐怖心というより呆氣をとられて見ていた。

正に、なんじゃありや、って感じであつた。

どうするものこうするもない、ここは撤退すべきだ。解らない物には手を出すな、特に食べ物とか。これ貧乏人の鉄則ね。

しかし、しかしだね。

こういつてはなんだが、あれは逆効果だ。

目の前には女の園。そして「やるなよ！絶対やるなよ！」と前振りにしか思えないほどの正直訳分らないレベルで造られた防備。これを前にして男としての反応は二つ。

進むか、進まないかだ。

そして俺はもちろん。

「進む」

「つぶなかつた！マジ危なかつた！！」

何なのあれ！？どんだけここの女の園は恐い防備で固められてるんだよ！

落とし穴の下に酸性のスライムなんて序の口、空気が徐々に抜かれ

て行く個室とか天井と床が同時に迫って行く個室とか矢やら棘の生えた鉄球やらが四方から跳んでくる個室。

どう考えても殺す気満々である。

全部入る前にそこら辺の燈台とか放ってみたら見事に罾が作動し、もれなく全ての家具類はお亡くなりになった。

その様を自分に置き換えてみるとゾツとしない。

ていうかタマタマの肝が冷えた。

「ようやく・・・ようやく本物の居住部屋・・・！」

だが俺は辿り着いた。

苦節というには壮絶で、苦行というには稚拙な道程を。

今目的の部屋の前だ。

どうして目的の部屋を探し当てたかって？

おいおい、俺がシルカの臭いを嗅ぎ間違える訳ないだろう？
間違いない、ここにはシルカがいる！

「おじゃましてーす・・・」

静かに、とても静かにドアノブに手を伸ばし・・・

ガチャッ。ガチャ、ガチャガチャガチャガチャガチャ。

「閉まってやがる・・・！」

ここに来てこの当たり前の事実を失念していた。
普通、余程不要な人物でなければ部屋のカギを掛け忘れるなんてことは起こり得ないだろう。
というわけで、蹴り破ろう。

「よーろれえーいつひいーーーーー!!!!!!」

全体重を後方へと向けた時だった。

「部屋の前で何やってのよ」

部屋のドアが開いた。

しかし既に蹴りの勢いはどうしようもない程付いていて、ドアが開いたということはそのドアがあった場所にはパネリアさんがいる訳で。

「おつとごめん」

「げふっ!!」

パネリアさんは粉碎されるはずだったドアの代わりに身体をくの字を曲げて部屋の中に吹き飛んで行った。そのまま仰向けに失神、結

構本気で鳩尾に入っちゃったからしばらく起きないと思われる。
やべえー…………どうしよう。

とりあえず……………、中に入って考えよう。

俺は部屋の中に入り込み、静かにドアを閉めたのだった。

「うつ…………あ…………」

「っ！！！！」

パネリアさんが起きた。

後ろめたさから、バツと座っていた椅子の裏に反射的に隠れてしま

う。

「あ・・・私は？ここは・・・」

「お、起きました？」

「！？」

「ちょちょちょつ、俺だつて俺！」

俺の声に反応したパネリアさんは、いきなり複数個のファイアアロ
ーを展開させたので慌てて隠れていた椅子から飛び出して姿を曝す。

「ああ、あんたね・・・。。。。。。っ！？なんであんたが
いるのよ！？」

「あー・・・それには海千山千ふかい理由がありまして」

「嘘ついたら火矢でハリネズミにするわよ？」

「やっぱり一人じゃ眠れなかったのでシル力求めて海千山千」

「あの防衛機能を越えてきたにしては随分な理由よね」

「いやー、黙つといてね？ほんと」

「・・・ま、聞きたいこともあったのよね」

そう言つて大量のファイアアローを消し去るパネリアさん。聞いた
ことが無かつたらもしかして火達磨だったのだろうか？・・・・・・
ありえる。

「そこに座つて」

「あ、はい」

パネリアさんは二段ベッドの下に腰掛け、俺は備えつけてあつた机
の椅子に座る。

「じゃ、聞くけどさ」

「う、うくり・・・」

結構緊張しながらパネリアさんの詰問を拝聴する。

「なんであの子はあんなに泣いていたの？」

「な・・・に・・・？」

俺はその瞬間頭が一気に冷えた。

第二話 その3

始めは誰を指して泣いていたと言ったのか解らなかった。
だが答えは当然としてそこにあり、俺はたぶん気付かないふりをしていたのだろう。

俺に対してパネリアさんが『あの子』と称するのは一人しかいないだろう。

「・・・・・・・・」

ベッドの方を見る。

そこには今までずっと見てきたいつも通りの寝顔で眠る我が妹、シルカ。

彼女が、泣いていた。

少なくともそんな姿、あの日以来見ていなかった。いや、それ以外で見たことがない。

その妹が、泣いていた？

サバサバしている印象を受けるパネリアさんが、こんなにも顔を顰めて妹の事を聞いてきたのだ。たぶん大分泣かれたのだろう、よく見ればその胸元の服には涙の跡がたつぷりと湿っていた。

今度はベッドを覗きこんだ、彼女の顔を良く見るために。寝顔はいつも通りだ。そう、こびり付いた涙の跡以外は。

呆然と、また備えつけの机の椅子に腰かける。

パネリアさんはジッと俺の行動を見ていた。

俺は二回程深呼吸をして心を落ち着けた後、視線を床に落としながら喋り始めた。

喋るといっく独白に近かった。

「知らなかった・・・」

「・・・・・・・・」

「そうか・・・泣いていたのか・・・そうか・・・」

どうも、俺は参っているようだった。

ぺらぺら話すという訳ではないが、聞いてほしい、聞かせたいという弱みが心の底から滲みでてきた。

どうしようもなく、ぶちまけてしまいたいのだ。

「俺は、そう、そうだ。いつも俺が泣いてて、そいつが慰めてくれた。俺は、それで眠れてた」

「・・・・・・・・そう」

言ってることは支離滅裂だったと思う。

順序も感情も前後不覚でうまく口にした言葉が出てこなかったが、それでもパネリアさんは時々相槌を入れながら辛抱強く俺の話を聞いてくれた。

「知らなかったんだ、俺は、ずっと支えられてきたのに、泣くなんて、シルカが泣くなんて思いもしなかったんだ。兄なのに、こいつの兄貴なのに、ずっと、寄りかかって来た分、守って行こうと思っていたのに」

顔を手で覆い隠し、俺は酷く自分を恥じていた。

情けない、愚かしい、女々しい、怠慢だ、傲慢だ、陳腐だ。

「そんな風に、俺は思っていただけで、俺は……！」

「……仕方ないわね」

「……えっ？」

そっと、やさしく抱きしめられた。

「デカイなりの癖に子供みたいね、あんた」

「十五つすから……」

「そうだったの。それじゃあ、仕方ないよね。まだ子供だもんね」

そう言って、パネリアさんは俺の頭をその胸にかき抱くようにしながら撫でた。

優しい手つき、どこか懐かしい香り、向けられる情愛、それらに戸

惑いながらも、反発する気持ちは不思議と起こらない。

「よく頑張ったわね。お兄ちゃんだもんね、よく頑張ったわ。ご褒美に、寝るまで一緒に寝てあげる」

「何すかそれ・・・何すか、それ・・・」

馬鹿にするな、と言いたかった。

だけど、思い出すのはあの光景と、あの時の自分。

その姿は確かに無様で、確かに醜悪だった。

あの時、シル力を一度置き去りにして逃げ出した自分。

それが俺の悪夢で、今でもその心を蝕み、恐怖させる出来事。

その悪夢が、今はほんの少しだけ和らいでいた。

「私は十七なのよ、お姉さんなの。年下の子が、恐くて眠れないなんて悲しい事、見てられないじゃない？」

「・・・そうっすか」

「だから私にドーンと任せて、今は眠りなさい」

そう言ってベッドに誘導され、大人しくそれに従う俺。ベッドに入り込むとパネリアさんが歌を、歌い始めた。

「彼は探すでしょう 亡くなった人を求めて
彼は探すでしょう 残してきた人を求めて」

それは悲しい詩だった。
それは綺麗な詩だった。

「彼は見つけたのか？ いいえ、見限られたのです
彼は見つけたのか？ さあ？ 孤独なのでは？」

．．．．．過去を追う男と．．．．．変わっていく世界の物語．．
．．．．．
．．．．．ああ．．．いやだなあ．．．男は報われないのだろうか．．
．．？

「さあ、時よ 全てを置き去りにして あなたは攫っていくのですね
ああ、時よ せめて一時ばかりの慈悲すら あなたは攫って行く
のですね」

．．．．．男は探し続けた．．．．．自分と自分の過去を．．．
けどそんな時すら過ぎ去って．．．．．
．．．．．そんな結末は嫌だな．．．．．そんなことを思いながら．．
．。

歌が導くように、俺は眠りに落ちて行った。

「おやすみなさい。．．．彼のようにはならなくてもいいのよ?」

最後に、そう聞こえた。

第二話 その3（後書き）

詩の部分は適当です

第三話 「起きぬけの模擬テスト」

「すげえ、ここが食堂か・・・広いな・・・」

「そりゃ百人も収容するんだもの、広いわよ」

「あ、兄さん！パンがあるよ！」

「マジで！？確保しろ確保！！」

何とも黒歴史に認定されそうなのはんずかすいー夜が明けて、俺達は寮内の食堂に来ていた。

寮は全部で三つの建物で構成されていて、まず男女の生活の場である男女寮、そして食事や大浴場などの施設を備えた中央寮がある。男女寮の間に中央寮があり、三つの建物が一つになっているのだ。

そんな中央寮の食堂だが、貧乏人の観点から言わせてもらえば、『一体いくら金をつぎ込んだんだ？』と思う程の料理にそれらが並ぶテーブル、これだけでもすげえの一言だ。

なんせパンがある、大量に。一日に一つ食べるか食べないかの瀬戸際の貧乏人からしたら考えられない量だ。

正に至福とも呼べる空間が、目の前に広がっているのだ。

これは堪能するしかあるまい。

「ふつ、我ながら恐ろしい・・・。いきなりパンを三つも取ってやったぜ！！」↑バターロールみたいな小さいパンの乗ったトレイを大きく掲げる十五歳男子

「兄さん、私このちょ、ちょこれと？のついたパンを取って来たよ
！」↑これまた嬉しそうに小さいパンが一つ乗ったトレイを持ち
上げる十四歳女子

「……」↑無言で湧き上がってくる哀しみに耐える十七歳女子

さて、早速席に着いて頂くか……？

何故か片手で顔を覆ってるパネリアさんの皿の上の物体。

ま、まさかこれは……！

「パネリアさん、こ、これは……？」

「……？ああ、若鳥の胸肉のグリルね」

「っ！！？」

「っ！！？」

ガタタツ、と椅子を押しのかけてその場で頭を下げる俺とシルカ、そ
して突然の行動に困惑するパネリアさん。

「お願いです！ちょっとだけでもいいんで妹に恵んでやってくださ
い！」

「お願いです！ちょっとだけでもいいんで兄に恵んでやってくださ

い！」

「ええ!？」

「ちょ、ばかお前。俺の事はいんだよ、育ち盛りの癖に遠慮すんなよ」

「私は、いつも兄さんの後ろで守ってばかりだから、食事くらい兄さんに楽しんでほしいの」

「お、お前……」

くっ、俺には過ぎた妹だぜ……。

「ていうか、普通にバイキング制なんだから取ってくればいいじゃないの……」

「ッ!？」

「ッ!？」

「いや、『ッ!？』じゃなくて……。あんたらどんだけ贅沢に馴れてないのよ」

そんなこんなでようやく食事を無事に始める事ができたのだった。

「ふう・・・食った食った」

「兄さん、食べすぎだよ」

「あんだね、この後冒険者になる為に授業があつて、その中には当然運動も入ってるのよ？そんなので大丈夫なの？」

「心配ない心配ない」

「不安ねえ・・・」

結局俺達は授業の始まるギリギリまで食事続けた、主に俺が。

だってあんなうまいんだもの！そら残さず食べなきゃばちが当たるでしょうが！

貧乏な肉体労働派社会人諸君、一言言わせてくれ。

てめえはその不味い飯を一人で不味い不味い言いながら食ってなざまあああああああああああああああああああ！！！！

「ねえねえ、教室ってどんなの？すごいよねえすごいの？」

「静かにしなさいよ、てかなんでそんなテンション高いのよ」

「え、朝だから？」

「訳が分からない・・・」

「正確には男の生理現象・・・」

「それ以上いったらファイアアローね」

「うつす」

やばい、無駄にテンション上がってるわ。

やっぱおいしい料理食べたからかな？めっさうまかったもんな食堂の料理。

うん、今日の俺のテンションおかしいっ！

「まったく・・・、ほら、そこが教室よ」

「蹴り破つていい？」

「普通に開けなさい」

じゃあ普通に、全力で開ける。

「ふんっ!!」

一度は開くドア、そして脚を踏み入れる俺、そして勢いを殺しきれず反動で戻ってくるドア、挟まれる俺。
沈黙に包まれる教室。

俺は何とか激痛を我慢して教室に入り、フラフラとした足取りで教卓に寄りかかった。

教師らしき年配の男性が心配そうに手を貸そうとするが、俺はそれを制して教卓に寄りかかったままこう言った。

「クインスです……」

この後俺が教室の片隅で変な奴扱いを受けたことは想像に難くないだろう。

第三話 その2

授業は『基礎体力』、『知識』、『職業別講座』の三つに分かれている。

『基礎体力』はその名の通り冒険者は身体が資本だ、その身体の使用方を学ぶ。

『知識』は冒険者として役に立つ知識を、地理、モンスター生物、職業の事など様々だ。

『職業別講座』は職業ごとに分かれる能力の使い方を学ぶ。アビリティ

この三つの授業から一つ自由に選んで一日かけてそれらの教えを請い、学ぶのだ。

三か月かけてこれらの中から自分にあつた授業を選択することで、冒険者としての方向性が決まってくる。

曰く、体力バカか、頭でっかちか、専門家が、そして冒険者か。

俺には『知識』は合わない。頭がよろしくないからな、机上の教鞭が俺の頭に刺激してくれるとは思えない。

『職業別講座』、こいつも論外だ。インコンプリテント無能力者の教師とか……俺だっってお断りだわ。つか何を学んだよ。

つまりは自然と学ぶ要素は一つに絞られてくる訳だ。

そう、俺は『基礎体力』を選択した。

で、今、

「君……何者だい？あの冷徹なる火矢と一緒に食事をするなんて」

なんかからまれてる訳だが。

「……………」

「だんまりとは、いささか失礼じゃないかな？ああ、僕の名前はライル、ライル・ベルネボブ・ケル・ファール。剣士ソートマンの資質を持つてる」

数人のお付きの手下を従えた綺麗綺麗な容姿を持った男が名乗って来た。

こいつ多分貴族だよなあ、何か名前も無駄に長いし。なんで話しかけてきたんだろ？意図が読めない上に気障な笑い方が不快だ。

あ、でも名乗ってるから、こっちも名乗らなきゃダメか、礼儀だし。

「クインス、ただのクインスだ」

「クインス君か。さて、君に改めて聞きたい。どうやって彼女に近づいた？」

「ん？あー……あれだ、畑荒らしたモンスターと闘やりあつてたら、あいつがモンスターの頭を俺の目の前で吹き飛ばしてな。それが縁で……思えば知り合つてまだ3日だな」

「……相変わらず野蛮な女だ」

「全くだ、毎回俺の一張羅を燃やそうとする」

なんとなーく俺とこいつとの認識の差異に気付いたが、争い事は面倒で得にならないと理解する程度の頭はあったので取りあえず話に合わせた。

すまん、パネリアさん。街に出た時なんか奢るわ。

「ははは、なんだ。始め食堂で見た時は仲良さそうだったが、僕の勘違いだったようだね。どうだい？君も僕のギルドに来ないか？」

「ギルドに？」

ギルドには二つの種類がある。

気の知れた仲間たちと共に集まる旅団ギルドと、それらをまとめて大きな形で運営する組織ギルドだ。

この場合、目の前の坊ちゃんが言っているのは旅団ギルドの方だろう。

こいつのギルドねえ……。

気分的に言えば、ない。

この人を見下した態度が気に入らないし、何より後ろに控えている手下も気の合いそうな気質はいないだろう。

一緒にいて楽しいかと言えば間違いなくノーだ。

しかしギルドに所属するというのはメリットにもなる。

報酬を分けあうことになるが、安全に依頼クエストを達成しやすくなる。

この養成施設が存在するのも、早いうちにギルドを作ったり所属したりするコネを創るためであつたりもするのだ。

自分で創るギルドは、それこそ一からの創設となる。軌道に乗るのも時間がかかるし手間もかかる。

逆に既にあるギルドに所属するのは手間もかからないし色々都合もいい。仲間関係を築くのに苦労したりもするが。

色々あるが、総合的に言うと。

「すまんが答えはノーだ」

「・・・何？」

「お前さんのギルドに入る気はない」

「・・・そうか、なら彼女とギルドでも創るのかい？」

「それもいいかもしれんな」

おめーとよりはな。

これで話しは終わりだ。

そう思ってそいつらから背を向けた時だった。

背後からの声、明らかな嘲笑を含んだ声。

「あの阿婆擦れに仲間なんて出来やしないさ、精々奴隷として利用されるか、性奴隷として利用されるか見ものだね」

あー・・・ちょっと無理だわ。

「おい、クソガキ」

「何かな？冷徹なる火矢の性奴隷君」

「俺は頭が悪い。おとろしく悪い。だけど解るぞ、ここは殴ってもいい場面だ」

「できるのならね」

向こうは坊ちゃん合わせて五人でこちらは一人、どうも不利だ。喧嘩なら確実に避けるべき状況。だけど避けるには恐怖と愚かさが必要。足りない。

だからこそ、俺は囲まれたのにも関わらず、落ち着いてクソ共相対する。

やるだけやるさ、後の事は・・・それこそ後から考える。

緊張が最高に達し、そのまま乱闘になると思われた時だった。

「貴様ら、何をやっている！」

「ちっ、運が良かったね」

「ちょ、待て。俺もこれじゃあ納得できねえよ」

「それではどうする？教官の目に止まってしまった今、喧嘩はど法度だぞ？」

「んなもん簡単だろ、倫理的かつ合法的にできる喧嘩と言えば決まってる」

「・・・・・・・・・・正気か？君が僕に勝てるとでも？」

「当たり前ーだろ、坊ちゃん」

「ゲスが、いいだろう、その案のつてやる」

「「決闘だっ！」」

第三話 その3（前書き）

おとろしくテンプレートな芝居がかった展開に、全俺が吹いた。
だめだこりやwww

第三話 その3

で、現在運動場の中央に在る模擬戦用のサークル内にいる俺と坊ちやんは、それぞれを睨みつけつつ身体を解していた。それぞれのスペックをおさらいしてみるか。

俺、身長178、体重70、身体はまあまあ出来上がってる、武器は模擬戦用の刃の潰してある両手剣と己の肉体のみ、技もクソもあつたもんじゃない剣術に我武者羅だけが取り柄の喧嘩スタイル。一応これが俺の今までのすべてだ。

加えて坊ちやん、ぱつと見身長167、体重59、身体は剣士にしては少し肉つきがある、武器は模擬戦用の刃の潰してある片手剣と盾、剣士になる為に学んできた知識と経験、剣を中段に構え盾を前に出すオーソドックスな構え。

方や重量で叩き潰す両手剣、方や技と盾で確実にチャンスを作る者にする剣と盾。

身体じゃ俺が勝ってるが、技、知識ではどうしようもない。

俺は野生児で、向こうは文明人だ。

さてはて、チコーツと頭に来ちゃって勢いで決闘することになっちゃったけどさ。

思えば安い挑発だったよね、なんで乗っちゃったの俺。

たかだか3日程度の知り合いに、何故あそこまで過剰に反応してしまったのか？

……たぶん、俺が馬鹿だから解らないんだろうな。

ま、くだくだ考えても仕方ない。目の前の事に集中しましょうか。

担当の教師が立会人として双方の意志を確認していく。

「ライル・ベルネボブ・ケル・ファールは、この決闘に何を望む」

「我が誇りと名誉を侮辱した謝罪を」

「クインスは、この決闘に何を望む」

「……えーっと、じゃあこっちも謝罪で」

こういう格式が必要なものって苦手なんだよなあ。
いつのまにか集まった観客がずっこけるのを感じた。
うっせ、黙ってろ。

「双方の威信を賭け、ここに決闘は成った。双方構えっ！」

互いに思い思いのスタイルで戦闘の構えを取る。
そして高く振り上げられた手が勢いよく空を切った。

「始めっ！」

あの坊ちゃんの事だから初めは様子見かと思ったが、どうやら案外腰抜けではなかったらしい。

互いに全力で剣を交わらせた。

派手な快音を立て剣が交わるが、拮抗は一瞬の事、坊ちゃんの剣が押され始めた。

必然、片手で振るより両手で振った方が力が入る、まさかそれを失念していたのか？

そう思っただけのわずかな違和感を感じた時だった。

坊ちゃんが力を抜いてこちらをいなすと、スルリと脇に傾れ込んで俺の腹に強烈な一撃を与えた。

「ガハッ!？」

「ふん、力ばかりでは僕には勝てないよ？」

確かに、今のが真剣だったら俺の腹は内臓までバツサリ、下手すると胴体まで逝かれてた可能性もある。

それだけ俺と奴の実力の差は歴然。

俺の対人戦の経験の浅さを見事に突かれた。

俺はモンスターと戦ってきたとはいえ、その勝率は決して高くない。生き残るだけでも精一杯だった。

要は技になれてない、故にあいつの動きが分からない。

ならば、どうするか？

・・・痛いが、やること自体は俺でも思い付ける単純なもの。やってるみか。

「もう終わりかい？」

「冗談だぜ坊ちゃん、おらあまだやれんぞ」

「ふむ、なら徹底的に叩き潰してやろう」

「ぐっ!？」

しゃがんでいるにも関わらず容赦ない追撃を、何とか捌きつつ立ちあがる。

「体勢が甘いね」

「つつつ!!」

右肩を打たれる。

感触的に骨に異常はないがしばらく動かせない。

こうなると両手剣のメリットが一気にデメリットになる。

まともに触れない剣ではあるだけ邪魔だ。

だが手放した所で俺がまともに受け続ける事が出来るとは思えない。
考え出した策もそれでは生きない。

なら意地でも喰らいつくだけだ。

「おおおおっ!!!」

「冷静さを欠いている君の攻撃なんてっ!」

「うぐうつ!!?」

腹を打たれる。

今日の朝飯を全部吐き出した。

あと肋骨にひびが入ったことが分かった。

だが立つのをやめない。

「呆れたタフさだね……。それでも僕は騎士^{ナイト}にもすぐ手が届くと

言われているんだがね？」

「頑丈だけが取り柄なもので・・・うハッ！」

「頑丈さね、修道士か何かかい？それならその頑丈さも納得だけどそれにしては動きも悪いし、あいつらは剣を使わない」

「なあに、ただのしがない無能力者だ」
インコンプリデント

「は？」

坊ちゃんの動きが止まる。

その間に剣を杖にして何とか俺も立つ。

呆気を取られていた坊ちゃんの顔は、やがて大きな嘲笑を作り大声で嗤い始めた。

「はっ、はははははははははは、無能力者！無能力者だったのか！はははははははははは！！！」

「んだあ、文句でもあつかこのやろー」

「あるとも！あるともさ、君のような弱者が！この私に盾突いたのだからね！」

「・・・」

「この世の鉄則くらいは君も知っているだろう？」

「・・・ああ」

この世界、サウルエルフォースでは弱者は生き残れない。

なぜならモンスターという脅威に加え、作物を育てる村々が現在モンスター被害によって悉く廃村と化しているからだ。

三十年前に起きた人魔戦争の影響で、一度村という村は焼き尽くされ、多くの人口が失われた。

一度失ったものを再構築するには多大な時間がかかる。復興が進められ漸く軌道に乗って来たところで、しばらく現れなかったモンスター被害が再発したのだ。

それに伴い食料の供給が滞り始めており、貧困層などは食糧自給で生活しているのが現状。

その中で食糧を安定して手に入れられるのは冒険者や上流階級のみ、正に弱肉強食の世界。

俺達はそういうところで生きている。

俺は無能力者という絶対的な弱者だ。
強者によって捕食されるべき対象だ。

「だがな、それでも牙まで抜かれちゃあ、男が廃るってもんよ!」

「なるほど、だが結局は捕食され、餌となるだけの君の言葉に意味など無いよ」

「そうかもしれない。だけど俺はこれでいい、ここくらいが、俺にはちょうどいい」

「弁えるのは良いが、それだけで私の気が納まると思うなよ。ゲス

が」

「あとはもう口じゃなくて剣で語ろつぜ」

互いに剣を構える。

もう十分、策の為の準備は整った。

策ともいえないなんと頭が悪い作戦だが、俺のできる唯一の突破口。

いざ、勝負へ！

第三話 その4（前書き）

感想お待ちしております、割とマジで。

第三話 その4

いいか、感情的になるな。

奴をぶちのめす道は出来上がってる、その為に癖も太刀筋も……
大体だがまあ見切った。

まずは振ることが出来ない剣を正面に突き立てる。

奴は怪訝に思うも、コンビネーションの癖として初撃は必ず素早く
短い横薙ぎで来る、今回は左から来た、よって突き立てた剣を握つ
たまま右に避ける。

俺にあたるはずだった剣は突き立てられた剣にぶち当たり、弾かれ
る。

この初撃が失敗すると、奴は必ず一步後退するので腰が沈む、なの
ですかさずがら空きになった奴の右側の耳に張り手を飛ばす。

張り手が決まりかっとなった奴は盾で突撃チャージしてくるので、腕に固定
されているという盾の性質を逆手に取り、突撃チャージの構えをとった瞬間、
盾の下側を持ち、引つ繰り返す要領で引き上げる。
すると腕ごと捻られながら盾が顔に直撃する。

怯みながらも奴も剣士を目指す端くれ、俺の頭を狙った横薙ぎを肘
で手腕の部分を押さえてブロック。そして痺れを無視した右腕の力
ウンターパンチをその綺麗綺麗な造形でできた顎に叩き込む。

続きリバーブロー肝臓打ち、鳩尾に左フックを連続で叩き込む。

完全に体勢を崩した奴への止めは、勢いの乗った裏通り流ノックマ
ナー、前蹴りを腹に叩き込んだ。

「ツツア!!」

「オホツ!？」

頭の中で仕上げたプランを一気に叩き込んだ。

観ていた輩は突然俺が強くなったように見えただろう、だが違う。どれかミスればそこで俺は終わりだった、奴の性格、癖を読んだからこそそのコンビネーション。

事実、俺は結局剣ではあいつを御し切ることはできなかった。

それに実力的にはあいつの方が上だ、俺の読み勘は野生の勘みたいなものだし、今回は鼻の調子が良かったし。

要は勝ったが気分的にはやべー危なかったやべーって感じた。

「そこまで、勝者クインス!!」

「なっ・・・ぐ、まっ・・・!」

「やめとけて、アバラ逝ってんだろ」

「うるさい! 貴様なんぞに・・・!」

痛みに顔を歪めながらもなんとか立ち上がろうとする奴に近づき、その脇に腕を絡ませ立たせた。

抵抗されるかと思ったが、敵襲心より痛みの方が勝ったようだ。

「何のつもりだ」

「別に、これはこれ、それはそれだ。今回の件は終わったし、またお前が侮辱してこない分には俺はお前と仲良くしてもいいと思うる」

「・・・正気か？僕は敵だぞ、味方じゃない」

「味方と敵が仲良くないなんて誰が決めたんだよ、少なくとも俺は認めてねーぞ」

「・・・とんだお人よしだね、君は」

「俺は別に・・・あれだし・・・誰でもあれだし・・・」

「ククク、なんだいそれ」

結局保健室に行きつく頃には、2人して女の趣味の事で喧嘩になってましたとき。
いやーあいつも中々だぜ。

「何やってんのよ」

「すみません」

で、反省会。

当然の如くこの決闘はすぐさま知れ渡ることとなり、俺は保健室のベッドの上でパネリアさんに頭を下げまくっていた。

因みにライルはパネリアさんの形相を見た瞬間気を利かせて退室していった。くっそたれ。

パネリアさんは授業を抜けてここに、我が妹は初日ということでもだ授業中らしい。

助けてマイシスター。

「えー……っと、あれです。今となれば恥ずかしい青春の一ページといふかなんというか」

「その恥ずかしい青春の一ページになった理由って私なのよね？」

「あー……えっと、はい。そうです、はい」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

無言・・・！無言の圧力・・・！

「全く、まだ知り合って三日でしょうに・・・・・・・・」

「それは・・・！はい・・・・・・・・」

パネリアさんはしかめっ面のままで、俺の脇腹を摩る。
罅が入ってるのであんまり触って欲しくないが、何か下手なこと言
わないように俺は我慢した。

「どうして、私の為に決闘なんかしたりしたの？」

「え、好きだから」

「えっ？」

「えっ」

ん？俺なんか今すげえこと口走らなかつたか？

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あつ、

しまった。

・・・今の冗談つつたら殺されるかな？

ま、いつか。なんで口が盛大に滑ったかは知らんが、言ってしまうと自分でもパネリアさんに対する感情を納得できた。

ここは冷静に対応しよう。

「そう、私は・・・別に、そうでもないわ」

「そっすか」

ごめん、冷静な対応無理。

「と、というか、いきなりななな何を言いだすのよあんたは」

「え、だから告白だって。めっちゃ好きやねん」

「わ、私はそうでもないわ」

「そっすか」

露骨に落ち込んでみる。

すると、途端に上ずった声でパネリアさんが「い、いや、でも嫌いってわけでも・・・」と返してくるので、可笑しくてついニヤニヤ笑ってしまう。

「ああもつ、とにかく、真面目な話私はあなたのことを特別思ってる訳じゃないわ」

「うんわかった、だからギルド作るうぜ」

「は？」

「ギルド作るうぜ」

「二度言わなくても聞こえてるわよ。その過程に疑問を感じたのよ」

「ノリ」

「特に何も考えてないって事は解ったわ」

その後も他愛もない話が続いた。

やがて日が傾いた頃、パネリアさんはいつもの調子に戻って帰って行った。

そのすぐ後、我が妹が参入。

「兄さん大丈夫だった!？」

「妹よ、俺好きな女の子ができたからギルド作ってラブラブするわ」

「兄さん!？」

色々詰問された。

第三話 その4（後書き）

後半グダグダですがうpしました。
うっす。

今さら人物紹介（前書き）

やる気が出たら更新する感じで

今さら人物紹介

主要人物

クインス・主人公。作者が書いてきた主人公の中ではまだ変態度低め。様々な黒歴史を持ち、最近の黒歴史は妹で抜いてしまったこと、バレたら殺されると思っている。戦闘に関しては野生の勘が効くがその他に関しては無能でお荷物。家事も妹任せ。パネリアさんにはほの字、理由は妹以外で自分の弱みを曝した事と、かつこいい女性だから。最近まで不眠症気味で誰かがいないと眠れなかったが、パネリアさんのお蔭でオナニーで気を紛らわして眠れるようになった。もちろんおかずはパネリアさん。ばれたら殺されると思っている。

パネリア・ローシェ・ヒロイン。実は設定用のノートにはこれだけしか書いてなかったりする。クインスの弱みを知る人物その2。告白されて動揺したけど、今のところクインスをそういう目で見ていない。だってまだ会って1週間も経ってないから。でも今後はどうか解らん。実は既に飛び級で冒険者の通過儀礼を受けているため、正式な依頼を受けられるが、本人は生活費を浮かせるために任期まで施設に留まる気にいる。

シルカ・主人公の妹。病弱だが、怪力。実は設定用のノートにはこれだけry。未だ描写は無いが可愛い物好きの変態。過去の影響を乗り越えたかに見えるが、夜は兄と同じく誰かが傍に居ないと眠れない。しかしパネリアさんのお蔭で兄同様眠れるようになった。

今まで出てきた脇役っぽい方々

キャシー・主人公たちの住む街、ロンドルの中央ギルドの受付嬢。いろいろ親切にしてくれた。最近の悩みはお肌に張りが無くなってきたこと。

学長・作者もまだ名前を考えてない。一応設定的には重要な立ち位置の人。腹黒のビツクールビューティー。怒ると魔法が飛んでくるのはお愛嬌。同じ魔法を司る者としてパネリアとシルカに期待しているが、クインスと共に騒ぎを起こすのだけはやめてほしい。

ライル・ベルネボブ・ケル・ファール・貴族の坊ちゃん。しかし三男坊なので相続権は無いに等しく、そのまま軍人になるのもめんどくさかったのでどうせなら自分の腕で成りあがろうと冒険者を目指す。作者が悪役にしようとして失敗した奴。大幅な軌道修正の末クインスと友好関係にある。取り巻きと共にギルドを作ってみたが、まだ正式に冒険者になった訳じゃないので最近はマンネリ化。

取り巻き達・坊ちゃんの取り巻き。それ以上でもそれ以下でもない。最近はマンネリ化した坊ちゃんのギルドとは別に自分たちのギルドを作ろうと画策している。

第四話 「予測不可能な、あるいは予測可能な」

あれから無事三か月程経ちまして、俺達は平和に暮らしていたわけ
です。

食堂のおばちゃんに頭下げてシルカの誕生パーティーやつたりその
後ライル呼んで派手にシャンパンファイトしてたら怒られたりこっ
そりシルカの魔法の練習に付き合ってたら裏山の一部が派手に吹き
飛んで怒られたり朝裸で一張羅を洗っていたらパネリアさんに見つ
かって火矢を乱射されて怒られたり何するでもなく学長室に立つて
たら何か勘違いされて怒られたり・・・。

とにかくいろいろな思い出が出来ました。

楽しく怒られた思い出・・・辛い怒られた思い出・・・シリアスに
怒られた思い出・・・テンプレに怒られた思い出・・・。

怒られてばっかだな俺。

そんなおかしいことはしてないつもりなんだが。

さて、そんな俺達は今学長室に呼び出されていた。

「なんすか？今日はまだ何もしてませんよ」

「じゃあなぜ上半身裸なのかしら」

「一張羅がついにパネリアさんの火矢の餌食になっちゃいまして」

「理由を聞こうかしら」

「えー？別に普通に告白しただけっすよ、公衆の面前で」

「・・・・・・・・・・はあ」

あの時は一瞬火に包まれてビビったが冷静に服脱いで難を逃れた。
あぶねー。

「いいから、その話はもういいから。学長話ってなんですかハリ―
アップでお願いします」

「ああ、まだちょっと動揺してるのね。そうね、みんな揃ってるこ
とだしそろそろいいかしら」

因みに学長室に呼ばれたメンバー、俺、パネリアさん、シルカ、坊
ちゃんの四人。

「あなた達、もうすぐ冒険者採用試験があるの知ってるわよね？」

「あー・・・あれね、痛いのだろ？やだなーうんこ漏らすのはやだ
なー」

「次それを引き合いに出したら殺すわよ」

「すいませんwww」

「で、選別試験があるのも知ってるわね？あなた達がそれだから」

『えっ！？』

「うお、びっくりした」

急に俺以外の奴らが驚きの声を上げた。
あまりの大きさにビビる俺。

「なになに、どうしたの？」

「なにつて兄さん！私達が選別試験に選ばれたんだよ！凄いよ凄
いよ！」

「いやその前に、選別試験って何ぞ？」

「えっ？」

「えっ」

なんかすごい呆気を取られた顔をするシルカ。
周りの奴等も同じような顔をしている。
なんだよ、照れるじゃん。

「恥じなさい」

「えー」

「えーじゃないわよ。この施設に居れば話くらい聞くでしょ？要はギルドへの推薦試験よ」

「へー推薦試験かー、……推薦試験!？」

推薦といったら普通、こいつは優秀であると紹介されるということになるわけだ。

この俺が、優秀だと・・・？

「なんだよがつくちょー！わかってんじゃん！」

「凍らせるわよ？」

「すいませんでした！」

ニヤケながらそう返すと大きな溜息吐かれる。

「ま、そういうことだから。その内容を伝えておこうと思ってこゝへ呼んだ訳だけど」

「そうなんかー」

「そうなんですかー」

「……その兄妹は若干不安があるけど、まあいいわ。内容は簡単よ、ある洞窟にある証を取ってくればいいわ。当然モンスター

も居るけど、あなた達なら問題無いレベルよ」

「随分簡単ですね」

「そうよ、優秀と言っても冒険者にも成っていない素人に、そこまですくは求めているもの」

「ふっ、中々言ってくれますね、エメルリーズ学長」

「言ってくれるも何も、油断してその馬鹿にやられたあなたには妥当だと思うのだけれど、ライル君？」

「「ガハッ!？」」

「すげえぞ、このドSパワー・・・!」
「思わずライルの坊ちゃんと共に跪いてしまった。」

「「そういう訳だから、あなた達は明日の通過儀礼の後も残って貰うわ」」

『はい』

そんな訳で、俺達の追加試験が決定した。

第四話 「予測不可能な、あるいは予測可能な」(後書き)

三ヶ月間の事はサラリと会話で語られるかも

第四話 その2（前書き）

単位とか設定メンドイな

第四話 その2

「はー、洒落てんなあ」

「どこがよ、どう見ても原始的な洞窟じゃない」

「いやいや、こういう冒険が詰まってそうなところに男はロマン感じるもんなんだって！な、ライル君」

「そうだね、クインス君。ところで君、上半身裸だけど大丈夫なの？モンスターとか」

「全然大丈夫じゃないけどね。でも頑張る」

モンスター出るってのにあの学長、薄着1枚くれやしねえ。

ちよっとくらい装備支給してくればいいのに、アイテムはポーションくれたけど。

ていうか俺素手なんだけど、上半身も裸なんだけど。

こんな状態でモンスターと闘^やりあうとか無理じゃね？でも闘^やる。だって置いてかれるのやだし。

「なあライル、一本くらいない？ナイフでもいいからさ」

「そう言うだろうと思って態々バスターソードを担いで来てやったぞ」

「振れねーよ」

どんくらい重いか解ってんのか？せめてグレートソードにしろよ。
一応貰ってみる。

「うお、こりや重い」

戦槍の1・5倍、ざっと8キログランか……。
振れるこた振れる……。か？

「おお……。！」

軽く一振り、身体ごと持っていかれる。

「無理だ、戦いにならん」

「情けないわね」

「これすんごい重いんすよパネリアさん、ちよつどパネリアさんのお尻くらい」

「何ですって？」

「何でもないっす」

ゆっくりと振り向いてくる彼女の顔を見る勇氣は俺には無かった。

無事に何とか通過儀礼をクリアした俺達推薦組は目的の証を取りに洞窟へと向かい現在到着。

ここであえて通過儀礼のことをちよつと回想してみよう。

『・・・・・・・・ブハッ!』

『あら、お帰り』

『パネリアさん・・・・・・・・これって・・・・・・・・』

『ええ、通過儀礼は冒険者になる為に過去のトラウマを乗り越える事が必要になるわ。しがらみを捨て、過去を捨て、冒険者となる為に』

『兄は!?!あの人痛いトラウマが一杯です!』

『そつえばまだ起きないわね・・・・』

『・・・・・・・・ブハッ!?!?』

『あら、起きたのね』

『あ・・・・・・・・ああ・・・・・・・・!』

『?』

『ごめんなさいイイイイイイ！！夜寝る為にパネリアさんで抜いてしまいましたアアアアア！！若気の至りだったんですウウウウウウ！！ああああああああああ！！！！』

殺して上げるわ、こっちに來なさい」

『ご、ごめんなさい！実はさっきも俺の中でパネリアさんが上に乗って喘いでました！』

『殺してやるわ！絶対殺す！これ絶対！！！』

「ごめんなさい！　！！！！！！」

あれは酷い事件だったね。

そんなこんな、これ便利な言葉だよな、場面転換とかに。回想してる内に洞窟内に侵入、しかし予想外にモンスターに手こずっていた。

「お、ああああああああああああああ！！！」

ズ
ド
バ
ッ
！
！

「ふつ、17分割にしてやったぜ」

「できてないよ、精々真つ二つになっただくらいだよ。というか手こ

ずり過ぎ」

「うっせー！こちとらバスターソードなんつー規格外の重量を振り回すだけで精一杯上に上半身裸だから攻撃喰らわねーように必死なんだよ！！てかおめーもそんな大したことやってねえだろうが！！」

「なんだとー！！」

「やんのかごらあー！！」

「なんでこいつら普段は仲いいくせにすぐ喧嘩するのかしら・・・」

」

「喧嘩するほど仲がいいってことですよ！」

「・・・そうね。それにしても、あんたが冒険者登録しないでモンスターとやりあってたって本当だったのね、異様に強いし」

「モチのロン。つかマジで命がけだったな、あの頃。つか登録の事知ってればもちっと楽だったのに・・・俺のバカッ！」

（それにしたって強過ぎでしょ。入門したての冒険者とは思えないわ）ボソボソ

（兄さん、毎日傷だらけで帰って来てましたから。私の為に頑張ってくれてたんです）ボソボソ

（・・・それだけ闘ったってことかい？モンスターと？何の力もなしに？）ボソボソ

やばい、みんなが俺を遠巻きに見ながらボソボソなんか喋ってる。
疎外感。

「ねえ、あんたって・・・」

「？なに？」

「・・・馬鹿ね」

「えー・・・」

「ふふ、本当に馬鹿」

何故かパネリアさんからバカ呼ばわりされた。
周りもなんか納得顔してるし、なんだよバカヤロー。

「んじゃ、とつと奥に行って証取って帰りましょう」

「「「はい」」」

第四話 その3

「東京以外日本じゃないから」

「何のことかさっぱりだがやばいこと言ってるのだけは解る!」

ザシュッ!

「北海道は別の国だから」

「もういいから黙れって!」

ドバッ!

「九州には福岡しかないから」

「おい!こいつらなんか知らんがヤバいぞ!」

ガスッ!

喋るモンスターなんて初めて見たが、そう珍しいものでもないらしい。

ゴブリンだって鍛冶師になる奴います、トロールだって魔法使える

奴いますです。

こういう喋るモンスターは最近になって発見されたが、その数は増加の一途を辿っている。

以上、パネリアさんとシル力談でした。

偉いな、シル力。ちゃんと勉強してたんだな。

俺は身体鍛えてばっかだったよ、坊ちゃんと。
だから何とか振れてるんだけどな。

洞窟の奥内まで侵攻してるが、一向に証とやらが見えてこない。

「ふう、なんとか終わったぜ……」

「中々の強敵だったね……」

「洞窟内に光苔が無かったらと思うとゾツとしないぜ」

あ、殆どのダンジョンにはさっき言った光苔なるものが存在する。
その生態はハッキリわかっていないらしいが、色々薬などへの用途にも使えることから重宝されている、と。
これも女性陣談。

「ちなみに図鑑じゃもっとヤバいのがいるらしいわよ」

『わたし女子アナ三十歳!』

「な、なんか解らんが恐ろしいな」

「恐ろし過ぎるよモンスター……」

なんか踏み越えてはいけない境界線を踏み越えてる様な気がする。
運営さんに怒られないかなこれ。
ん？運営さんって誰だ？

「このモンスターそんなに強くないし、ほら、さっさと行きましょ」

変化は突然起こった。

洞窟の奥から見えた微かな光。

そして……殺気。

「ツツ！ライル！！」

「任せろ！！！」

バツとライルはパネリアさん押し倒し、そして俺はシルカの前に立つ。

同時に現れる閃光。

俺はそれに向けて思いつきりバスターソードを振り下ろした。

「おっらアアアアアアアアアアアアアア！！！！！」

バスターソードの重量と俺の体重を全て乗せた斬撃は、接触と同時に閃光を弾き飛ばした。

「ふっ、この程度・・・俺様にかかればこんなもんよ!」

「膝震えてるよ兄さん!」

「平気か、・・・パネリア」

「あ、・・・ええ、へ、平気よ・・・」

パネリアさんは背中を打ち付けたいが、それ以外は怪我らしい怪我は無かった。

むしろ押し倒したライルの股間を思わず蹴り潰したらしく、無言で転がり続けるライルに何とも言えない同情の念が沸き上がって来た。とりあえず、その地獄の痛みに関しては俺にできる事は無いので、ライルは放置することにした。

「何もんだ!出てこい!」

洞窟の奥を睨みながらそう言うと、奥から誰かが近づいてくる足音と往年のしわがれた男の声が聞こえてきた。

「なるほどな・・・奴ら寄こすだけはある、か」

やがてその姿が露わになる。

そこには、上半身裸でバスターソードを背負った角生えたおっさんが、居た。

いつの間にか回復したのかライルが俺の肩を掴んで隣に立っていた。

「さて、言いたいことは解る」

「あれ、君の親戚でしょう。なんでダンジョンに上半身裸とか無謀な装備で来るの？てか装備してないよ？バカなの？死ぬの？」

「いや・・・マジで知らねえ・・・」

「私も知りませんよ」

つか俺が成長した姿か、モンスターになった姿みたいだな・・・、嫌過ぎる。

突然の謎のモンスター？の登場に啞然とする俺達。

「我輩は魔神・・・人魔戦争を引き起こした張本人だ！」

「なんか語り始めたぞ」

「めんどくさいわね・・・」

唐突に喋り始めた魔神（仮）。

しかしその実力は先程の攻撃で実証済みだ、下手に刺激することはできない。

なのであえてめんどい語りに付き合うことに全員合意した。

「……………ねえ、もう喋ってもいい？」

「解ったから早く話せよｗｗｗｗ」

「あ、うん……。我輩は過去、人であった……。」

「ブハッ！ｗｗｗｗ」

「あ、うんってｗｗｗｗ」

「クスッｗｗｗｗ」

「くっ、やるじゃないのｗｗｗｗ」

「……………人としての幸せを噛み締めていたのだ。

だが！あいつが……。憎いあいつが！私の愛しい人を奪ったのだ
！！」

ビシッ！と奴が指さす方を見ると、壁に何かの映像が映っているの

が見えた。

シルカに見せて貰った水晶への念写に似てると思った。

『ごめんなさい、あなたとは付き合えないわ。私は好きな人もいるし、……。だから夜遅くまで付きまとうのはやめて貰えませんか』

綺麗な女の人がそう言って頭を下げている場面だった。

おそらくこいつ視点からの映像なのだろう。

……。つか、これ。

「だから……。我は力を……。力を欲したのだ！こんな世界はいらぬと！そう決めたのだ！」

演劇的な動きでこちらに振り返りながら両手を広げる魔神（笑）。

「我は魔神なり！！……。あの戦いでは敗れはした、だが負けてはおらん！力を蓄え、我は復活したのだ！！」

さあ、我を恐怖せよ！世に喧伝せよ！魔神の襲来を！！」

「つか自分がフラれたからって理由で戦争起こしてんじゃねーよボケカス、迷惑だから死ねよ」

「正直男の視点から見ても……。気持ち悪いね」

「振られた理由がよくわかるってもんでしょ」

「・・・・最低です」

「・・・・」

魔神（笑）が呆然としてさっきのポーズで固まっていた。

第四話 その3（後書き）

まだまだ続くよ！

受け身を取り、即座に立ちあがる。

奴はやばあーい感じに殺気立っており、先程までのようなヘタレた雰囲気は無い。

本気か・・・。

「まずはお前からだあああああー！」

「なっつっとおおおお！？」

魔神がこちらに思いっきり振り下ろしたバスターソードを何とか防いだ。

瞬動とも呼べるその速度に反応できたのは一重に勘だ。

ギリギリと噛みあう剣と剣が、しだいに俺側に押され始めた。

「うおおおおおー！！こいつヘタレの癖に意外とすげえ強いぞー！！」

「くっ、シルカ！通信お願い！蒼天！曇りなき御霊は、揺れなき鼓動を見る者なり！——『サーチスコープ 索敵情報』——！！」

「は、はい！眼よ！耳よ！その伝えるを風と共に！——『ヴィジャブ通念話』——！！」

視覚に明らかに俺のじゃない情報が混じった。

どうやらパネリアさんとシルカが、魔法で奴の情報を洗い出してこちらに直接送っただけらしい。

詳細な奴の情報をチラッとだが確認する。

『ノリオ・サン
魔神・攻撃力3500 ・防御力788』

俺のステータス『・攻撃力100 ・防御力150』

こいつぁ勝てねえ・・・。

「・・・勝てないわね。魔神って言うのは嘘じゃないらしいわ」

目線がライルと偶然交わり、同時に頷きそして叫ぶ。

「「逃げるっきゃねえ！！」」

するとライルはささっと女性陣の傍によると俺に聞こえるギリギリの声で喋り始めた。

「このまま彼を殿にして逃げちゃいましょう」

「おい待てこら」

あの野郎、後絶対殴る。

「あ、やべっツツコんでたら力抜けて!？」

「ふはははは!死ねえい！」

「どうみてもこのままじゃ即落ちるわね。仕方ないわ、全員ここに残って」

「シルカだけ逃がして！」

「兄さんだけ逃がしてください！」

「……あんたらの仲がいいのは解ったから。やっぱ全員で逃げるしかないかしらねえ……」

「我輩が逃がすと思うか？」

「……よねえ……」

くっそ、こいつマジつええ……。

今や俺は膝をつきながら奴の剣の押え込みに耐えていた。

一瞬でも身体力を、いや、筋一本でも緩めれば即座に俺の身体は真っ二つだ。

それでも、少しずつ、少しずつ剣が近づいてくる。

不味い、これ以上は……!

声が遠い。

遙か向こうには何がある？

「兄さん！」

ああ、ダメだろ。

お前はダメだろ。

こっちくんなよ、そんなに必死に。

「リアル妹だと・・・！！ますます許せぬ・・・！」

そしててめえは何を言ってるんだ。

・・・ッ！やめろ、その手のデカブツをどうする気だ。

振り上げて、シルカに向けて、どうするつもりかって聞いてんだよ・
・・！！！！

「あ・・・め・・・シ・・・ル」

「^{さえず}囀るな、ゴミが」

「ツツツツツアゝ！?!」

折れた。肋骨が完全に。

激痛が全身に響き渡るが、俺はそれに構ってる暇は無かった。

やめろ、やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ
 ろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ
 ろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ
 ろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ
 ろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ

これだけ祈っても、身体は指一つ動きやしねえ。
手も、伸ばせない。

そうやって黙って、妹の死を見届ける事しかできないのか。認めねえ。そんなこと断じて・・・！

「娘よ、貴様が我輩の妻と為るならば、この男を許してやらんでもないびよ」

[illegible]

「そろそろういえば、我輩、まともに女子と喋ったことない」

「どこまでヘタレなんだてめえはあああああああああああああ
あああ!!」

身体の痛みを忘れてシャウトした。
こんな存在の為にシリアスしていたかと思うと腹立つところではない。殺意が沸く。

第四話 その4（後書き）

ビククールビューティーさん登場。

第四話 その5

「三十年前の不始末を、終わらせに来たわよ。嬉しいかしら、魔神^{ノリオ}」

「貴様か、貴様かああああああ!!」

そう会話を交わし、激突する両者。

魔神一（笑）と学長が知り合い？

人魔戦争を起こしたのが魔神（笑）で、その中心に関わっていたという事か。

そつえばあの映像で映ってた女の人って学長に似てる……似てる？

あー……なるほどな。

大陸中を巻き込んだあの戦争の発端がまさかこんな理由だったとは……。

喜劇で済む様な生易しい戦争じゃなかった。人が死に、土地が荒れ、国は傷つき疲弊した。それだけの戦争を起こしておいて、その理由がこんなにも下らないことで、それでもまたあいつは戦争を起こそうというのか。

ふざけやがって、どうかしてるぜ。

俺の勘が言っている。放っておくなど、今ココで殺せと。

だが俺は身体を動かすことが出来ない。全身を少しでも動かすと激痛が走る。

残念だが、奴の始末は学長に任せるしかないようだ。

「兄さん!!」

「おう・・・シルカ・・・」

「大丈夫か！」

「死んでは・・・ないわね」

「ライル、揺らすな。パネリアさん、傷口抑えないで・・・！」

2人が睨みあっている間にわらわら集まってくる皆さん。

それぞれ思い思いに俺の状態についての心情を語ってくれた。

表情から読み取れる感情は、シルカは心配、ライルも心配、パネリアさんは・・・興味とちよつと心配。

興味って、傷口の状態とか？前々から思ってたけどパネリアさんって嗜虐的だよね。

「あなたを想い、耐えるのか　あなたに願ひ、恋えるのか　想ひ願ひ
いそして繋がる——『^{ヒール}治癒』」

「お、おおおおおおおおおおおおおおお！！！」

パネリアさんが回復を掛けてくれたお蔭で、身体の内激痛や違和感が薄れて行く。自分が中から生まれ変わっていくようだと思った。その変わりようにテンションも上がって行く。寝転がった状態から跳び起きる。

「俺、復かつゝあつつつ！？」

「骨はまだくっ付いてないわよ」

「いだだだだだだだだだだ!!?」

調子に乗り過ぎていたようだ、残念ながら再び倒れ込む。

そうこうしている内に向こうでドンパチしていた学長たちの方で変化が生まれていた。

……最悪の方向で。

目線の先には、跪く学長と、多少傷を負い、剣を失いながらも悠然と立ち続ける魔神。

「随分と、弱くなったものだなあ、エメルリーズよ」

「そうね……、私も年をとった……。変わらないのは、いえ、取り残されたのはあなただけよ」

「ふん、負け惜しみを……。このぶんなら人類殲滅も楽そうだなあ！ふはは……。はーはははー！」

クソツ垂れ、学長ですら止められないだと。

しかも、しかもだ。奴は許せないことをした。この俺を前にして。

俺を障害にもならんと無視しやがった……。！

「待てよ！まだ……俺がいるだろうが！！」

「……ふん、貴様らなど相手にならぬわ。精々恐怖するがいい、人間どもよ！我輩の凱旋だ！」

そう言って洞窟の出口へと去っていく魔神。

[illegible]

「くそつ……垂れ……」

「兄さん!？」

「ああもう、無茶するから……！」

その背中を睨みつけながらも、徐々に暗くなつて行く俺の視界。くそっ……。！ならば誓つてやる。お前の首は、必ず狩る。この俺が、クインス^ズが狩りに行く。

このまま黙って見過ごすことはできない。

無視しやがった……！無視されるぐらい弱かった……！

これじゃ、これじゃあ復讐できねえだろうが！！！！

俺達の村を焼いたあいつらに……！！

「あなたはこいつ運んで！私はエメルリーズ学長を運ぶから！」

「あ、ああ！」

「兄さん！兄さん！！」

「落ち着きなさい！治癒^{ヒール}掛けといたから死にはしないわよ！」

声が遠くで聞こえる。

だが頭の中で燻っているのは復讐の炎だった。

強く、この出来事を忘れないように胸に刻みつけながら、俺は意識を落とした。

第五話 「魔の発端」

少しばかり過去を振り返っていた。

自発的なものとは違い、眠ると強制的に現れてくれやがるその過去は、最近では見なくなっていたものだつた。

前の俺には無かった欠落を作りだしたそれは、心の傷などではなく、心の死傷とも言える。

心のどこかが、あの時確かに死んだ。

炎に包まれた記憶の中にあるのは、血まみれで倒れ伏す両親と、それを見下す黒いフードを羽織った男、そして男の隣りで腰を抜かしているシル力。

頭に血が昇り、そいつに殴りかかった。

しかし、そいつは何でもない風に避けると、躊躇いもなくシル力を何処からともなく取りだした短剣で刺した。

「シルカアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

力なく倒れ込むシル力。耽々と佇む男。

再び俺は奴に殴りかかった。

カウンター気味の前蹴りで転がされる俺。

その強烈な手加減なしの一撃に、俺は理解した。殺される、俺は何もできやしないまま殺される。

情緒も、情けも、施しも、躊躇いも、手向けも、殺意も、意味も、戸惑いも、ここに立っていることも、晩飯を気にするような気軽ささえも持たずに、無感動にこいつに殺される。

湧き上がって来たのは怒りではなく、恐怖だった。
倒れ伏す妹や両親の存在さえ頭の中から放棄して、俺は奴から距離を取る為に必死になって逃げ出した。

『くそっ・・・くそつくそつくそつくそつくそっ!!』

情けなく、無様に、そして醜悪な己の本性を覗いてしまったようで、どうしようもない自分のあり様に絶望してるのに、それでも足を止める事が出来ない。

『くそっ!!!!』

それでも、止めた。止めてみせた。

そして決意を決めて、覚悟を固めて奴の下へと戻ると、そこにはシル力達以外誰も居ない。

急いで脈を調べ、シル力以外死んでるのを確認すると、俺はシル力を担いで炎に包まれた村を走り抜けた。

脚が重くなり、走ってるというより歩いてると呼べる速度になっても、足を動かした。

『大丈夫だシル力・・・!後もうちょっとだからさ、ぜってー復讐しようぜ・・・!あいつらに、ぜってーにだ・・・!』

それが、俺達の始まりで、終わりで、今なお外せない鎖だった。

「うおおおおおおおおおおおおお!!!!」

「起きて早々叫ぶなバカ」

「イタッ!?!」

起きあがったと思ったら、いきなり後頭部をはたかれた。

その張本人であるパネリアさんが、少し疲れた表情をしながらこちらを見ていた。

どうやらベッドに寝かされていたようだ。

「兄さん!」

「うおっ!」

いきなりベッドの脇からシル力が現れた。
何故か寝巻で。

「お前さんなんでここにいるん?」

「兄さんが心配だったから一番近くで見てようと思ったの!」

「そうか、なら仕方ないな」

俺もそうする。誰だってそうする。

「んな訳ないでしょ。それで、起きた所悪いんだけど学長がお呼びよ」

「学長………あっ! そうだあいつは!」

「さあ? どうかそこら辺に居るんじゃない?」

「くそっ……！あの野郎ぜってーに殴る！」

「はいはい、それより早く行くわよ」

着替えを渡され、包帯だらけの身体の上からそれを着込む。

おニユーの一張羅の着心地は中々だった。例えると、今までゴミクズだったのが普通レベルにアップした感じ。

「ていうか、あれからどんくらい経ってんの？」

「ああ、ほんの二、三時間くらいよ。というか、あんた本当に丈夫よね、普通なら治癒^{ヒール}掛けても疲労は消せないもんなのに」

「久しぶりによく寝たからじゃね？いつもは一時間くらいだし」

「……兄さん」

「それでも十分眠れてるって、前は『自主規制』しかやることなかったし」

「ちなみに、題材を聞いていいかしら？」

「え？最近だとパネリアさ………あっ」

「……吹き飛びなさい」

「え、待つて待つて、だって男ならやるじゃんしちゃうじゃん、だ

って好きな人だよ？やるに決まってんじやんなあそうだろ？全世界の紳士たちよ好きな人がいたらむしろ普通の事だよオナ・・・」

ファイアアロー
火矢、おいしく頂きました。

第五話 その2

「学長ちゃーっす」

「返事くらいちゃんと――何その傷？」

「メイクメイク、適当にやってたら失敗した」

「ところで君、起きちゃって大丈夫なの？全身包帯巻きの上に生傷だらけだけど」

「大丈夫大丈夫、死にゃせん死にゃせん」

死にかけたぜ。色々含めてな。

「それで、色々話して貰えますよね？」

パネリアさんがそう言つと、学長は一度頷きやがて口を開く。

「私は人魔戦争を終わらせたギルド、『レジェンド軌跡』のメンバーだったのよ」

「……なあ妹よ、一応言つといた方が良いかな？」

「……兄さん、素直なのが美德なのは子供の内だけですよ？」

「じゃあ大丈夫だな。軌跡^{レジェンド}ってなんぞ？」

皆さんの視線が突き刺さる。いゃん。

「単純に言えば、昔魔神・・・ノリオと戦う↓勝った↓ただで完全には滅することができなかった。という大まかな流れだけ理解すればいいわ」

「捕捉を入れておくと、要は今のギルドの元となった伝説のギルドよ」

「了解」

「そして私たちは冒険者ギルドを創った・・・情けない話だけど、私たちの意志を、もつとぶっちゃけるなら奴を倒せる後継者が現れてくれることを願って」

「この事を知っている人は？」

「この国の王様とギルドのお偉いさん方よ。一般の構成員は『軌跡^{レジェンド}』が冒険者ギルドを創ったことすら知らないわ」

この流れ、もういいよな？説明ばつかじや飽きるぜ。

「質問しといてなんだがよ、そろそろあいつの話しようぜ。あのク

ソ野郎、倒す方法はあんのか？」

「……無いというか。知らないというか。なんというか？」

「解らんのかい
イイイイイイイイイイイイイイイイ！！！！」

ここに来て衝撃の事実だった。

そして突然開かれるドア。

「話は聞かせてもらっただあ！」

「え？誰あのおばさん」

薄い翡翠の髪を三つ編みに、学長と同じくらいの年齢の美麗な女性
が現れたかと思うと、俺の発言に目に見えて床に手を着いた落ち込
みのポーズをし始めた。

「おばさんじゃないもん……まだお肌プニプニだもん……」

「なんだあのめんどくさい人」

「……元『^{レジエント}軌跡』のメンバー。現冒険者ギルドのモンク部門の総
長。ラザルよ」

めんどくさそうに学長が言うと、先ほどとは打って変わった晴れやかな笑顔でついでにポーズを決めつつ立ちあがるおばさん。

「ほら、写真撮るなら今のうちよ?」

「そして若干ウザい人よ」

「把握した」

「失礼しちゃうわね・・・でもそういうことよ。エメルリーズ、連絡聞いた時は冗談かと思ったけど、その様子じゃ本当のようね。・・・ならこの件ギルドに報告しておくわ、伝わるかどうかは各マスターたちの判断だけど」

「それで、結局のところどうするんです?」

「あなた達には関係のないことよ」

ライルの質問を見向きもせずに戻す。

途中おばさんがチラッとパネリアさんを見ると、何かを含んだ笑みを浮かべた後真剣な顔で学長を見据えた。

「久しぶりに大仕事になりそうね、エメルリーズ」

さっきの言葉もそうだが、このおばさんの言葉が俺の琴線に触れた。

「おい、無視してんじゃねーよおばさん。なに俺達の事関係ねーみたいなこと言ってるんだよ！」

「恐ろしい位口が悪いわね……。あなた達程度のパーティーは引っこんでなさいって事よ」

「ふざけんな！あの野郎……。俺のことを無視しやがった……。！」

「おいおい！興奮すると傷が……。！」

「大丈夫だ。それよりもなあ……。今はムカついてんだ！あんなクソ野郎に……。無視されるくらい弱かった！！これじゃ復讐できねえんだ……。！」

痛む傷を無視して叫ぶ。燃えたぎる気炎を魅せ付ける。

「だから俺たちも混ぜろ！あの野郎ぶっ飛ばしてやる！！」

「無理」

「……………ん？」

「……………んん？あれ？気のせいかな？今

無理って聞こえた気がするんだけど」

「言ったわよ？無理よ無理。あなたじゃ全然お話にならない」

「んなこと関係あるか！混ぜろ！あの野郎には貸しが数えきれねえくらいあんだよ！！」

「……エメルリーズ、いいかしら？」

「……あんまり派手にしないでよ？」

そう会話を交わし前に掛っていた三つ編みを掻き揚げ後ろに下すと、なんでもない散歩を楽しむ様な笑みを浮かべながら一言呟くおばさん。

「心配ないわ、ちょっと実力の程を思い知らせてあげるだけだから。来なさい、一撃入れられるかどうか試して上げる」

「上等だ！！手加減はしねえぞ！！」

そう言つて数メートル先にいるおばさんの懷に一気に潜り込むと、救い上げるようなアップパーカットを入れる……。はずだった。実際は踏み込んだ脚を難なく払われ、仰向けに倒れ込む俺の腕を掴まれ関節を掛けられながら一瞬で組み伏せられた。

「ぐあっ！？」

組み伏せられた俺は見た、背後からライルも蹴りを仕掛けているのを。

どうやらこいつも先程の発言に納得できなかったようだ。

騎士道精神もクソもない不意打ちは、あの一瞬で彼我の実力差を考慮したうえでの攻撃なのだろう。

「そういう訳で、私に一撃も入れられないようじゃ、魔神なんて・・・」

「なっ!?!」

しかし完全に不意を突いたはずの蹴りは、軽く屈むだけで交わされた。

片足立ちになったライルの脚を、奴は俺に関節を決めたまま足払いすると頭を引っ掴み思いつき床に叩きつけた。

「倒せないって、言ってるの」

「ガハッ!?!」

苦悶の声を上げる俺とライルに、興味無くしたようにその場から離れるおばさん。

「弱いわ。話にならないくらい弱い」

痛みと悔しさに齒噛みしながらも、俺は立ちあがって減らず口を叩く。

「へっ、おばさんくせにやるじゃねーかよ」

「あんた殺すわよ！さっきからおばさんおばさんって……！私はそんなに年いってないわよ！！」

「実際どうなのかしら、学長」

「……………」

「うるせえ、おばさん！それでも、あれくらい越えられなきゃ！俺達の目的を果たせねえんだ！」

「このまま生かして貰ったまま、おめおめ生きていくなんてできないからね、おばさん」

「またおばさんって言った……。あーもーだからね？別に今すぐに討伐へ向かう訳じゃないの、時間は掛けられないけど準備はする。それに前の対戦であいつとまともに闘りあったら勝てないってわかってる訳だしね」

くるっと学長の机の上に腰を下すと、そのまま話を続けるおばさん。

「あいつを完全に消滅させるには準備が必要よ。だけど三十年前から下準備を続けたとはいえ、それでもまだ不十分。そうね……。数カ月かかるわ。それだけ掛けて、奴を消滅させるだけの秘密兵器を出すわ。もちろんそれだけじゃ足りない、おそらくギルドの上位メンバーにも召集がかかるでしょ」

そこで一旦声を切り、俺達を厳しく見据えるおばさんに、俺達の緊張度合いも増す。

「もし、もしもよ？討伐を仕掛けるまでの期間中に、あなた達が連れていっても問題なしと判断されたら、あなた達の参加を認めるわ」

「強くなるだけ強くなれって事ですな……」

「弱い奴がいても足手纏いでしょ？少なくとも魔神相手にまともに生き残れる程度、サーチスコップ索敵情報基準で数値にすると、大体上位職のレベル75〜90あたりかしら。……この短い期間でその頂まで登ってこれるのなら、その才能を認めましょう」

互いに肩を貸し合い姿勢を保っていた俺とライルは、顔を見合わせて取りあえず相談し合う。

「どうする？めっちゃムズそうだけどそんな頑張る？」

「たりめーだろボケ。あのクソぶっ飛ばしてついでにそのおばさん認

めさせてやんよ
「

「んじゃそれ乗った」「

「そちらはどうするのかしら?」「

パネリアさんが一度こちらを見て溜息をついてから、シルカは真っ直ぐ迷いなく。

「乗りがかった船だし、やるしかないでしょ」

「私は兄さんに着いていきます!」

その言葉を聞いて、俺は実のところすげーホッとしていた。とにかく、俺の冒険は色々あってスタートしたのだった。

「……で、聞いときたいことがあるんだけど」

「何かしら？」

「なんでギルドへの推薦試験であんな奴がいる洞窟に行かなきゃならかったわけ？」

「私説明したくないからエメルリーズパース」

「……証を取って来なさいと言ったわよね？あれがあいつから出る排泄物なようなものの。その具合をみて復活までの期間を測ってたのよね」

「排泄物つて？」

「うん」だらうん」

[illegible]

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9526y/>

冒険の準備はいいか？

2011年12月20日17時48分発行